

「こころ久しく云々」この一句は「多うまさりて云々」に續く。

見るままに 大君の様子をじつと見てゐると、薫は氣もそぞろである。

只いと心苦しうて 只大層お氣の毒な有様で跡に残られる中君の事が氣にかります。大君に返事させようと思つて中君の事を引合に出して薫が仰しやると。

斯くはかなかりける こんなに短命な私でしたものを、愛の總てをそよいで戴いたそのかひもなをから、跡に残る中君を、私と同様に思召して下さいと申上げたのを、もしその通りにして下されましたら私も安心して死なれ、執り残さうな氣が致しませんでした。思はれて、この事だけ執着が残るさうな氣が致しませんでした。いかにも、どんな事があつても、あなたに心の引かれる以外に此の世の宿着はありませぬやうな事になりました。

うしろめたくな 中君の事は御心配なさるな。

さま／＼に 下の「加持まゝらせ」に係る。祈禱の功驗ある僧のみに命じて。俗世間を厭離せよと世の中を、お勧め下さる佛などが、こんななひどい心配を私におさせになるのであらう。この一文は「見るままに……いみじきわざかな」を修飾する。即ち厭離を勧める佛の示現と思はれる程に悲しい現象であつたの義。程を引きとめず、死にゆく大君も、さうで、人が愚癡な男と思ふのも顧みない。

限りと見奉り もう最期と思つて中君が自分も一緒に死なうと途方にくれてゐられるのも當然である。中君が殆ど失神状態であられるのを。

さりとも いくら何でも死なれる筈はない。「いかが亡せ給はむ」などの意。

にあるべき筈のものでもあるまいと思ふと、きものにもあらざめりと見るが、惜しきことたぐひなし。ここから久しく悩みて引きも繕はぬけはひの、心解けず恥かしげに限りなうもてなしさまよふ人にも、多うまさりてこまかに、見るままに魂もしづまらむ方な・・・し。遂に打捨て給ひてば、世に暫しもとまるべきにもあらず。命もし限りありてとまるべうとも、深き山にさすらへなむとす。只いと心苦しうてとまり給はむ御事をなむ思ひ聞ゆる」と、いらへせさせ奉らむとて、かの御事をかけ給へば、顔隠し給ふ・御袖を、すこし引きなほして、大君斯くはかなかりけるものを、思ひぐまなきやうに思されたりつるもかひなければ、このとまり給はむ人を、同じ事と思ひ聞え給へとほのめかし聞えしに、たがへ給はざらましかばうしろやすからましと、これのみなむ怨めしき節にてとまりぬべく覺え侍る」と宣へば、斯くいみじう物思ふべき身にやありけむ。いかにも、ことさまにこの世を思ひかかづらふ方の

侍らざりつれば、御おもむけに隨ひ聞えずなりにし。今・なむくやしう心苦しうも覺ゆる。されども、うしろめたくな思ひ聞え給ひそ」などこしらへて、いと苦しげにし給へば、修法の阿闍梨ども召し入れさせ、さま／＼に驗ある限りして、加持まゝらせ・・給ふ。我も佛を念せさせ給ふこと限りなし。世の中を殊更に厭ひ離れねとすすめ給ふ佛などの、いと斯くいみじき物は思はせ給ふにやあらむ。見るままに、物のか・れゆくやうにて消え果て給ひぬるは、いみじきわざかな。引きとどむべき方なく、足摺もしつづく、人のかたくなしと見むことも覺えず。限りと見奉り給ひて、中の君のおくれじと思ひ惑ひ給へるさまも、ことわりなり。あるにもあらず見え給ふを、例のさかしき女ばら、「今はいとゆゆしきこと」と引きさけ奉る。中納言の君は、さりともいかが、斯かることあらじ、夢かとおぼして、御となぶらを近うかかけて見奉り給ふに、隠し給ふ・・顔も、た

斯くながら 此儘蟬の抜け殻のやうにいつまでも見ておられるすべからず見つても慰めつ深草の山けぶりだに立てし御ぐしをかきやる 臨終の折に髪をそいで戒をかきおろすのであるから髪をかきおろすのである。 どういふ缺點を取上げて大君が少しでも平凡な女であつたと考へて戀心をさます事が出来ようぞ。

いとど思ひのどめむ 念ずれば念ずる程一層心の落着けやうもひたぶるに亡骸を見るのが苦しいのでまるつきり煙にしてしまはうと。

空を歩むやうに 薫はまるで空を歩んでゐるやうにふらつきかか。 「あきれて歸り給ひぬ」に煙も多く、亡骸が直に燃え盡してしまつて、火葬の煙もあまり多く立ちまよはずに終つたのも飽氣ない事だと薫は惘然とし御忌後四十九日、薫は惘然とし御忌後四十九日、薫は惘然としあるから忌に籠る人も多いのである。

中の君は 句宮に捨てられたと思つて他人の手前も恥かしい身又亡き人に見えぬ。 大君と同様中君も死にさうに見える。 思はずに 案に相違して恨めしけずと思召した大君の御氣持も解せずと思召すまゝ死んでゆかれたい事ある一人の御ゆかり」で一語。

三條の宮の 御母女三宮の御嘆を斟酌し。 かの宣ひし 大君がいはれたやうに中君を大君の形見としてでも見るべきであつたのに。 したの心は 一移ろふべくは覺えざりしを 一修飾する。 かう物思はせ 句宮にあるはせて中君にこんな物思をさせるよりなつて、盡きぬ慰めとして永く連れ添つてゐたらよかつたのかき絶え 世の交はりは一切絶つて。 「こもりおはす」に係る。

おろかならず 大君に對する愛情は並一通りのものではないと見もし聞きもして。

だ寢給へるやうにて、^{生前と}變り給へるところもなく、うつくしげにて打臥し給へるを、斯くながら、虫のからのやうにても見るわざならましければ、^{薫が}と思ひ惑はる。 ^{臨終の作法}今はの事どもする。 ^(E)御ぐしをかきやるに、^{髪にたきしめてある薫物の香が}さとうち匂ひたる、^{まるで生前の儘の匂ひに}ただありしながらの匂ひに、なつかしうかうばしきもありがたう、何事にてこの人をすこしもなのめなりしと思ひさますむ、^{眞に佛が私に世を捨てさせる手引として大君を下さつたものな}誠に世の中を思ひ捨て果つるしるべならば、^{悲しさをさめてしまひさうな怖しけいかなんかでもこの死骸の上に見つけさせて下さい}怖ろしげに憂きことの、悲しさもさめぬべき節をだに見つけさせ給へ、と佛を念じ給へど、いとど思ひのどめむ方なくのみあれば、いふかひなくて、^{亡骸を}ひたぶるに煙にだになり果ててむ、とおもほして、とかく例の作法どもするぞあさましかりける。空を歩むやうにただよひつ、^{茶毘に附す時の}限りの有様さへはかなげにて、^{けぶり}煙も多くむすぼほれ給はずなりぬるもあへなしと、あきれて歸り給ひぬ。御忌にこもれる人かず多くて、心細さはすこし紛れぬべけれど、

中の君は、人の見思ふらむことも恥かしき身の心愛さを、思ひしづみ給ひて、又亡き人に見え給ふ。 ^{句宮}宮よりも御とぶらひいと繁く奉れ給ふ。 ^{以下中君の心}思はずにつらし、と思ひ聞え給へりし氣色も、おぼしなほらでやみぬるを ^{中君が}思すに、いと憂き、人の御ゆかりなり。 ^薫中納言、かく世のいと心憂く覺ゆるついでに ^{出家したい}本意とげむ、と思さるれど、三條の宮のおぼさむことに憚り、^{中君が氣の毒}この君の御事の心苦しさに思ひ亂れて、かの宣ひしやうにて、形見にも見るべかりけるものを、^{薫の本心では}したの心は、^{たとひ中君が大君の分身であつても乗換へる氣はしなかつた}身を分け給へりとも移ろふべくは覺えざりしを、かう物思はせ奉るよりは、ただ打語らひて、盡きせぬ慰めにも見奉りかよはましものを、^{禁中}など思す。 ^{宇治に}初に京にも出で給はず、かき絶え慰むかたなくてこもりおはするを、世の人もおろかならず思ひ給へる事と見聞きて、^{供養}うちより始め奉りて、^{申間}御とぶらひ多かり。 ^{禁中}はかなくて日頃は過ぎゆく。七日々々の事ども、いと尊くせさ

ていふ事能はずといひしかば、
童子何をか食せんと問ふに、
肉を食せんといふ。童子我身を
與へば、生滅々已、寂滅爲樂と
唱へたり。童子石壁に書付けて
谷なる鬼の方へ飛び給へば、口
せたり。鬼は帝釋天也(和而記
之)

思はずに 意外に冷淡な方であ
つた事が分つて。
さすがに 内心では苦しんで居
りながら、中君にはさうし居
配を知られまいと胸一つに世を
恨んでおられた間に、一寸した
お菓子も召上らず、一寸した
弱してゆかれたやうでござい
うはべには 表面は別段仰々し
く深い心配のあるやうにもな
らずに、心の遣ひをしてゐられ
たやうでございませぬ。
故宮の 夫を持つて苦勞するな
との故宮の御遺誠にまでも背
いた事よと、中君のお身に上
なさらぬまでも責任を感じて心
なさらぬまでも責任を感じて心
し始められたのでございませ
病氣になられたのでございませ

取返さまほしく 昔が取返した
くおもはれて、伊行釋引歌「取
返すものもがなや世の中を
りしながらの我身と思はむ」

さななりと 薫は句宮の入來と
聞き知つて。

御忌は 四十九日までにはまだ
數日あつたのだが、句君は待
し、くじつとしてゐられなくて、
一晩中雪の爲に路がわからず
ごつきながらやつて來られたの
である。
日頃の つらさも 句宮のこの御
訪問で、日頃の恨みも忘れられ
さうな折節ではあるが、句宮に
おぼし歎きたる 中君が句宮に
捨てられた事、大君が句宮に
られたのが、中君の態度を見直して
たのに、句宮の態度を見直して
貰へず、大君死後の今から改心な
つたところ、何の心か改心な
と、中君は思ひこんでゐられる事

ぞ、心ぎたなき聖心なりける。
薫が女房達を
人々近う呼び出で給ひて、御物語などせさせ給ふけはひなどの、
いとあらまほしうのどやかに心深きを、見奉る人々、若きは心
にしめてめでたしと思ひ奉る。老いたるは、(只)大君の逝去を
き事をいとと思ふ。老女等「御心地のおもくならせ給ひしことも、た
だこの宮の御事を、思はずに見奉り給ひて、人笑へにいみじと
おぼすめりしを、さすがに、かの御方には斯く思ふと知られ奉
らじと、只御心一つに世を恨み給ふめりし程に、はかなき御菓
子をも聞召しいれず、ただよわりになむ弱らせ給ふめりし。
はべには、何ばかり事々しく物深げにももてなさせ給はで、し
たの御心の限りなく、何事も思すめりしに、故宮の御誠めにさ
へたがひぬる事と、あいなう人の御うへを思し惱みそめしなり」
と聞えて、折々に宣ひしことなど語り出でつつ、誰もく泣き
まどふこと盡きせず。わが心から、あぢきなき事を思はせ奉り

けむことと、取返さまほしく、なべての世もつらきに、念誦を
いと・あはれにし給ひて、まどろむ程なく明かし給ふに、まだ
夜深き程の雲のけはひいと寒げなるに、人々聲あまたして、馬
のあと聞ゆ。何人かは斯かるさ夜中に雪を分くべき、と大
とこたちも驚き思へるに、宮、狩の御ぞにいたうやつれて、濡
れく入り給ふなりけり。うちたたき給ふさま、さななりと聞
き給ひて、中納言は隠ろへたるかたに入り給ひて、忍びておは
す。御忌は日數残りたりけれど、心もとなく思しわびて、夜一
夜雪にまどはされておはしましける。日頃のつらさも・
紛れぬべき程なれど、對面し給ふべき心地もせず、おぼし歎き
たるさまの恥かしかりしを、やがて見なほされ給はずなりにし
も、今よりのちの御心改まらむは、かひなかるべく思ひしみて
物し給へれば、誰もくいみじうことわりを聞え知らせつつ、
物越にてぞ日頃の怠り・盡きせず宣ふを、つくくと聞き居給

ほれなくしきまでぼけてゐる程物思に沈んでゐられるので。大君の歎きの爲である。

この宮にこそは外に語るべき人もないから句宮から聞いて頂いてせめてもの心やりにしたいかたくなしく愚癡らしく思はれるのを遠慮して薫はあまり口敷をきかない。

女ならば自分が女であつたら、自分(句宮)をさしおいて薫に移りかかはるだらうと句宮は自分の不料簡な癖からそんなな思ひつかれるにつけても、なまうしろめたければ中君が薫に心を寄せはせぬかと何だか心配になつたので。「京に移ろはしてむ」にいかで「京に移ろはしてむ」に係る。世間の誹りや夕霧などの恨みも受けたいやうにしてせむつれなきは冷たな取扱を受けるとは苦しむものであるといふその點を句宮に身にしみて感じさせたくて、到頭中君は打解けずにかたわられたと思ひ知らせむかて苦しきものと思ひ知らせむ

御わざも七々日の供養も薫の指圖で厳修される。御誦經など布施の料などをうるさい程澤山送つて寄越された。斯くかのみやは薫の心。薰が一向無沙汰で宇治に引籠つてゐられる事を苦情いつて來られるので。

斯くおはしならひてかやうに薫が長く此處に居馴れたので自然人の出入も多かつたのだが、その名残もなく寂しくなる事をいみじく覺ゆ。いみじく悲しく覺ゆの意。

時々折節折節につけて風情を失はない程度に文通してゐられた今迄よりも、かうしてゆつくりと此處にゐられた此頃中の御態度が、やさしく又情も深く、とりとめもない遊びたはぶれにも又生活上の事にしたの、薫はよく行き届いた方でしたの、もうこれきりお目に懸る事が出来なくなつて悲しい。

女房達を氣樂に人々安らかに呼び使ひ、女房達も大勢がかりで食事差上げたりなどしてゐるのを人もあまたして物參らせなどし給ふを、句宮の心にあはれにもをかしくも御覽ず。薫のさまいといたう瘦せ青み、(七)ほればれしきまで物を思ひたれば、句宮は薫を氣の毒がられて心苦しと見給ひて、心から再問されるまめやかにとぶらひ給ふ。大君生前の様子などをありしさまなど、今更詮ない事だがかひなき事なれど、この宮にこそは聞えぬ、と思へど、うち出でむにつけても、いと心弱くかたくなしく見え奉らむに憚りて、こと言ずくななり。薫は數日間聲を立てて泣いてねをのみ泣き日數經にければ、人相が變つたのも顔がはりのしたるも、見苦しきはあらで、いよく物清げになまめいたるを、女ならば必ず心移りなむと、あのがけしからぬ御心ならひに思し寄るも、なまうしろめた、中君をければ、いかで人の譏りをも恨みをも省きて、京に移ろはしてむ、と思す。句宮が斯くつれなきものから、うちわたりにも聞召して、いとあしかるべきに思しわびて、今日は歸らせ給ひぬ。おろかならず言の葉を盡し給へど、つれなきは苦しきものと、一ふしをおぼし知らせまほしくて、心解けずなりぬ。

年の暮れがたには、宇治のやうな山奥でなくとも斯からぬ所だに、平素とは變つてゐるのだが空の氣色例には似ぬを、年未故荒れぬ日なく降り積む雪に、物思ひに耽りつ、うち眺めつつ明し暮し給ふ心地、薫の盡きせず夢のやうなり。御わざも、いかめしうせさせ給ふ。句宮よりも、御誦經などこちたきまでとぶらひ聞え給ふ。此儘嘆きを新年までも持越す譯にはいけないみやは新しき年さへ歎き過ぐさむ、女三宮や冷泉院などからここかしこにも、おぼつかなくて閉ぢこもり給へる事を聞え給へば、今はとて歸り給はむ心地も、たとへむ方なし。薫の斯くおはしならひて、(俗も俗も)人繁かりつる名残なくならむを、宇治の人々思ひわぶる人々、大君逝去の折の當面の悲しかったいみじかりし折のさし當りて悲しかりし騒ぎよりも、薫がゐなくて森閑としてうちしづまりていみじく覺ゆ。女房時々折節、薫が宇治の宮にをかしかなる程に聞えかはし給ひし年頃よりも、薫の斯くのどやかにて過ぐし給へる日頃の御有様けはひの、(やか)なつかしくなさせ深う、はかなき事にもまめ、大君が無事ならば未長くお目に懸られたのになる方にも、思ひやり多かる御心ばへを、句宮今は限りに見奉りさしつること」と、女房達は誰も彼も涙に咽ぶのであつたかの宮よりは、「なほから參りくること」と、宇治に

近うわたい奉る中君を近所に引取る方法を考へ出しました。
 後の宮聞召しつけて以下は句宮が宇治にいひやつた次第を註するものである。
 げにおしなべて句宮が中君に熱中してゐられるのも當然だと氣の毒がられて。
 女一の宮の御方に引取るにかこつけて中君を女一の宮の女房になさるお積りではないかと氣を廻しては見るもの、始終逢へるのが嬉しくて、以上のやうに宇治にいひ送つたのであつた。
 か御かはりに大君の代りと思つて中君をこゝに引取つて妻ともすべきであつたのにさうと、昔に立返つて心細い氣がする。
 宮のおぼし寄る中君と薫と心をかはしはせぬかと疑つた事、心一八九二頁にも「女ならば必ず心移りなむと云々」とあつた。心いと似げなき以ての外の事と念頭の御後見は一通り（夫婦と大方の御後見は）の世話は自分としてでないの意）の世話は自分であらうぞと思つてゐられるとか。

いと難きを思ひわびて、近うわたい奉る（らん所）べき事をなむたばかりいである」と聞え給へり。（中君に）後の宮聞召しつけて、中納言も斯く（明石中宮が中君の事を）あるかならず思ひほれて居た（誰にも人並には思はれない女たらう）なるは、げにおしなべて思ひがたうこそは誰もあぼさるらめ、と心苦しがり給ひて、二條の院（中宮が句宮を）の西の對にわたいたまひて、時々も通ひ給ふべく、忍びて聞え給ひければ、女一の宮の御方に、ことよせて思しなるにや、と思しな（句宮は）ながら、あぼつかかなかるまじきは嬉しくて、宣ふなりけり。（大君を）さななりと中納言も聞き給ひて、三條の宮・造り果ててわたい（薫の心）奉らむことを思ひしものを、かの御かはりにならずらへても見るべかりけるをなど、引返し心細し。（句宮が邪推してゐられた點は）宮のおぼし寄るめりしすぢは、いと似げなきことに思ひ離れて、大方の御後見は我ならで（中君の）は又誰かは、と思すとや。（薫が）

いゝいゝ

藪し分かねば、宇治に於ても春の光を見給ふにつけても、大君に死別した歎きにも拘らずいかで斯くながら
へにけむ(三)月日ならむと、夢のやうにのみ覚え給ふ。行きかふ時
時に随ひ、花鳥の色をもねをも、同じ心に起き臥し見つつ、は
かなき事をも、もと末を取りていひかはし、心細き世の憂さも
つらさも、姉妹互にうち語らひあはせ聞えしにこそ慰むかたもありしか、
をかしき事あはれなるふしをも、聞き知る(六)・人もなきままたに、
よろづかきくらし、心一つを碎きて、父宮逝去の宮のおはしまさずなりに
し悲しさよりも、本當の一人きり故ややうちまさりて戀しくわびしきに、いかに
せむと、明け暮るるも知らず惑はれ給へど、中君は世にとまるべき程
は、限りあるわざなりければ、死なれぬもあさまし(七)・わびしきに、
・阿闍梨のもとより、「年改まりては何事かおはしますらむ。
御祈りはたゆみなく仕らまつり侍り。今は一所の御事を(八)・な
むやすからず念じ聞えさす」など聞えて、土筆蕨、つくづくし、
をかしき籠に入れて、「これは童への供養じて侍る初穂なり」と

藪し分かねば、日光は何處の隈
古今雜上一日の光敷しわかねば
石の上ふりにし里に花も咲きけ
りいかで斯く中君の心。
行きかふ時々に四季の循環に
つれて、花の色鳥の音をも姉妹
とて心持で常に眺めつつ、姉妹
も同じ心持で常一人が上の
句を詠めば他が下の句を詠み續
け。

をかしき事、面白き事をも悲し
い事をも、聞いて分つてくれる
人がないの、中君は暗い氣持
の中に一人胸を痛めて居つて。
いかにせむと、こんなに苦しく
てはどうかしらよいかと、月日
の過ぎてゆくのも知らず、途方
にくれてゐられるけれども。

すずろに旅寝せむも 別段の用事もなくて宇治に泊るのも、人に疑はれるのもつまらないから。

思ほし宣へる 薫が仰しやつた事を辨が中君に語つて。

人は皆 人は皆京移りの準備に勢ひ立つて居る中に、私は一人こゝに居残つて別離の涙に袖を濡らして居ります。「たつ」は袖の縁語。袖の浦に袖の意をひびかす。鹽垂るる 私の袖はお前の袖とは違つてゐるからして、句宮の御心の頼りなきに濡れるのです。後撰戀三「心から浮きたる舟に乗りそめて一日も波に濡れぬ日ぞなき」此處をば「思ふ」に續く。此の家が荒廢してしまはうとは思はなぬもの。暫しの程も 一寸の間にせよ、心細い氣持で留守居してゐられぬ。猶更氣が進ませぬ。猶更猶世の常に やはり世間並に考へて、たまには京へ尋ねて来て下さい。

斯く人より かやうにあなたが人よりも深く姉君の事を歎いてゐられるのを見ると、前世でも特別の縁でもあつたのかと、さう考へられるといふ事までが、あなたを睦まじくもたまらなくも思はせる。

心まさめむ方なく 心の落着けやうもなく涙に溺れて居つた。御前の人々 前驅の人々。

御みづからも 句宮御自身も非常にお迎へに来たく思召すけれども、それでは事が大袈裟になつて却てわるからうから、人目だたぬやうに徴行の體にして、氣をもんでゐられる。

大方の事をこそ 一通りの事をこそ句宮からお指圖になつたやうだが、こまかくした内證のお世話は、すつかり薫から、行届かぬ事なく面倒を見てあげられた。日暮れぬべし そんなにぐづくひさうです。は日が暮れてしま

れど、すずろに旅寝せむも、人の咎むる事や・・とあいなければ、歸り給ひぬ。

思ほし宣へるさまを語りて、辨はいとど慰めがたくくれ惑ひたり。皆人は心ゆきたる氣色にて、物縫ひいとなみつつ、老いゆがめるかたちも知らず、つくろひさまよふに、いよくやつして、

人は皆いそぎたつめる袖の浦に獨り藻鹽を垂るるあまかなと愁へ聞ゆれば、

「鹽垂るるあまの衣に異なれや浮きたる波に濡るるわが袖世に住みつかむことも、いとありがたかるべきわざと覺ゆれば、

さまたに隨ひて、此處をばあれ果てじとなむ思ふを、さらば對面もありぬべけれど、暫しの程も、心細くて立ちとまり給ふを見

おくに、いとど心もゆかずなむ。斯かるかたちなる人も、必ずひたふるにしも絶えこもらぬわざなめるを、猶世の常に思ひな

して、時々も見え給へ」など、いとなつかしう語らひ給ふ。昔の人のもて使ひ給ひし、さるべき御調度どもなどは、皆この人にとどめおき給ひて、斯く人より深く思ひ沈み給へるを見れば、ささの世も取り分きたる。契りもや物し給ひけむと思ふさへ、睦まじくあはれになむ」と宣ふに、いよく童べの戀ひて泣くやうに、心をさめむ方なくおぼほれ居たり。

皆搔拂ひ、よろづ取りしたためて、御車ども寄せて。御前の人、四位五位いと多かり。御みづからも、いみじうおはしませまほしけれど、事々しくなりて、なか／＼あしかるべければ、只忍びたるさまにもてなして、心もとなく思さる。中納言殿よりも、御前の人々、かず多く奉れ給へり。大方の事をこそ宮よりはおぼしおきつめれ、こまやかなる内々の御あつかひは、ただこの殿より、思ひ寄らぬことなくとぶらひ聞え給ふ。「日暮れぬべし」と、内にも外にも催し聞ゆるに、心あわただしう、

二〇九

いみじう 大變句宮のお氣に召
して大事にしてゐられるといふ
事を蕨が聞かれるにつけても。

さすがに 自分の物にしよう
と思へば出来たのにと思ふと、
蕨は自分ながら馬鹿らしく胸を
ひしがれたやうな氣がして、
物にもがなや伊行引歌「取
返すものもがなや世の中を
りしなごらの我身と思はむ一
しなごらや眞の契りこそはな
しいが、中君は一度は私と共寝を
した女だ。上句は「まほ」に係
る序詞。

斯く思ひの外の 斯様に思ひも
寄らぬ中君を、六君よりも先
とのお思召のやうに、俄に迎へ
取つて大事にし、六君からは遠
ざかつておられるので、夕霧が
大層不愉快に思つておられると
お聞きになるにつけてもお氣の
毒故。
世に響きて 世にひびく程の大
騒ぎをして、裝着祝の用意をした
のであるが、
人笑へ 中君に壓されての延期
と開いては外開がわるいから
同じゆかりに六君では叔父の結
婚で珍らしみのない縁組だが、
この中納言をこそ人に 河内本
に従ふべきである。

さるべき人して 仲人を以て蕨
の意向をたしかめさせたが。

目に近く見しに 大君の死によ
つて世の無常をまご／＼と目撃
した事故。
身もゆゆしく 妻に先立たれる
といふ忌はしい因縁を持つてゐ
る身。
いかにもく 大事な事があつ
ても結婚などといふ事は氣が進
まなくて出来ませぬ。
いかでか 出来ませぬべきで、
係る。自分がことわられはしな
いかとこは、いものにははるやう
にいかと申出てゐる縁談だのに、
句宮ばかりか蕨までが二の足を
踏まれるといふ法はない。

二條の院 中君が句宮に迎へら
れてそこに居るのである。
心やすくや 拾遺春「淺茅原ぬ
しなき宿の櫻花心やすくや風に
散るらむ」
此處がちに 句宮は近頃大方こ
の二條院に落着いてゐられて。
めやすのわざや これ心安心だ
とは思ふもの。
例のいかにぞや 例のどうかと
おもはれる、あまり感心の出来
ない嫉妬心の起るのほけしから
ん事である。

前の人々 歸り参りて、有様など語り聞ゆ。いみじう御心に入り
てもてなし給ふなるを聞き給ふにも、かつは嬉しきものから、
さすがにわが心ながらをこがましく胸うちつぶれて、蕨物にも
がなや」と、返す／＼、獨りごたれて、

しなごらや鳩の湖に漕ぐ舟のまほならねどもあひ見しものを
とぞ言ひくたさまほしき。
けちを附けたい氣がする

左のおほ 殿は、六の君を宮に奉り給はむ事、この月にと申し
定めたりけるに、斯く思ひの外の人を、この程より先にと申し

がほにかしづきすゑ給ひて、離れおはすれば、いと物しげに思
したりと聞き給ふもいとほしければ、御文・は時々奉り給ふ。

御裳著のこと、世に響きて急ぎ給へるを、延へ給はむも人笑へ
なるべければ、廿餘日・に著せ奉り給ふ。同じゆかりに珍

らしげなくとも、この中納言をこそ人に譲らむか口惜しきに、
さもやなしてまし、年頃人知れぬものに思ひけむ人をもなく

なして、物心細く眺め居給ふなるを、など思し寄りて、さるべ
き人して氣色取らせ給ひけれど、蕨世のはかなさを目に近く見

しに、いと心憂く身もゆゆしく覺ゆれば、いかにもくさや
うの有様は物憂くなむ」と、すさまじげなる由聞き給ひて、い

かでか、この君さへ、あぶなく言いつることを、物憂くはも
てなすべきぞ」と恨み給ひけれど、親しき御中らひながらも、

人さまのいと心恥かしげに物し給へば、え強ひても聞え動かし
給はざりけり。

花盛りの程、二條の院の櫻を見やり給ふに、主なき宿のとまづ

思ひやられ給へば、蕨心やすくや」など獨りごちあまりて、宮

の御もとに参り給へり。此處がちにおはしましつきて、いとよ

う住み馴れ給ひにたれば、めやすのわざやと見奉るものから、

例のいかにぞや覺ゆる心の添ひたるぞ怪しきや。されどじちの
御心ばへは、いとあはれにうしろやすくぞ思ひ聞え給ひける。

蕨の蕨 中君が句宮に愛されてゐる事を知つて感しく思ひ安心された

蕨は氣のおける人だから

蕨と夕霧は異腹の兄弟

無理に六君を押しつけるやうな事も出来なかつた

宇治の山莊

句宮

實直な性

二二三

立ちいで 薫は句宮のそばを立
つて中君の居られる對の御方へ
山里のけはひ 宇治の有様とは
打つて變つて。可愛らしい童女
をかしげなる内にちらつてゐる
の姿が御簾の内にちらつてゐる
昔の童女を以て中君に來意を
告げると。宇治時代の事情
知りの女房なのだらう、それが
朝夕の隔ても 始終お目に懸つ
てゐられさうな近所に居りな
らぬ。格別の用事も無いにお
伺ひするのでも却つて無難けな
いふお叱りもあらうかと遠慮し
てゐる爲に、世の中が一變した
やうな氣持が致しますばかりで
す。

心苦しげなるま 河内本は本の
儘。君がおはせましかば、ほんに姉
君が御存命で薫と結婚してゐら
れたならば、始終存分に往來し
て、お互に花の色や鳥の聲をも
折々につけて見はやし聞きは
して、少しは満足して世を送る
のであつたに。

出て給はむとて 參内の爲にお
出かけにならうとして。御罷に
來られた。中君にお暇乞の挨拶に

中納言はこなたに あゝ薫が中
君方に居られたのだなと。薫が中
御あたりには、あなたに對して
は餘り變だと思はれる程にあぶ
なげの伴はない薫の御厚情でし
たが、あなたを見はせぬかと
わが爲は、あなたを見はせぬかと
心配ですが、併し薫を全然身近
に寄せつけないやうな事をして
は罰があたる。

疑はしき 薫が内心どんな事を
考へてゐるか安心は出來ません
よ。わが御心にも、人からいはれ
ないで薫の御親切はかねて、瞻
に銘じてゐる事故、今になつて
疎外すべき理由もないから。

何くれと御物語聞えかはし給ひて、夕つかた宮はうちへ參り給
はむとて、御車の裝束して、人々多く參り集まりなどすれば、
立ちいで給ひて、對の御方へ參り給へり。山里のけはひ引きか
へて、御簾の内心奥ゆかしにくく住みなして、をかしげなる童の透影すきかげほ
の見ゆるして、御消息聞え給へれば、御茵しとねさし出でて、昔の、
心知れる人なるべし、出で來て御返り聞ゆ。朝夕の隔てもあ
るまじう思ひ給へらるる程ながら、その事となくて聞えさせむ
も、なか／＼なれ／＼しき咎めもやとつみ侍る程に、世の中
變り沙汰でにたる心地のみぞし侍るや。お前の梢も霞隔てて見え侍る
に、あはれなる事多くも侍るかな」と聞えて、打眺めて、物し
給ふ氣色、心苦しげなるを、げにおはせましかば、おぼつか
なからずゆきかへり、かたみに花の色鳥の聲をも折につけつつ、
すこし心ゆきて過ぐしつべかりける世を、など思し出づるにつ
けては、ひたふるに絶えこもり給へりしすまひの心細さよりも、
まるで世間に顔を出さなかつた

飽かず悲しう口惜しきことぞいとどまさりける。人々も、「世の
常に疎々しくなもてなし聞え給ひそ。限りなき御心の程をば、
今しもこそ見奉り知らせ給ふさまをも、見え奉らせ給ふべけれ」
など聞ゆれど、人づてならず、ふとさし出で聞えむことの、な
ほつつましきを、やすらひ給ふ程に、宮出で給はむとて、御罷
申にわたり給へり。いと清らに引きつくるひけさうじ給ひて、
見るかひある御さまなり。中納言はこなたになりけりと見給ひ
て、取次なしに直接應對する事 匂などかむげにさし放ちては出だしすゑ給へる。御あたり
には、あまり怪しと思ふまでうしろやすかりし心寄せを。わが
爲はをこがましきこともやと覺ゆれど、さすがにむげに隔て多
からむは、罪もこそ得れ。近やかにて、昔物語も打語らひ給へ
かし」など聞え給ふものから、匂さはありとも、あまり油断しすぎるのも考
へものです。疑はしき下したの心にも、ぞあるや」と、
びせむも、又いかにぞや。疑はしき下したの心にも、ぞあるや」と、
打返し宣へば、一方ならず煩はしけれど、わが御心にも、あは

女房達
薫の志
中君
中君が中君に
御罷
御罷

かの人も 薫も仰しやるやうに
薫を大君の代りと思つて、切に
感謝してゐる氣持をあらはす何
物か。あつた。いものだとは思召
すが。
とやかくやと 何やかやとあれ
やこれやにつけて句宮が二人の
仲を疑はしいやうに仰しやるの
で。

れ深く思ひ知られにし人の御心を、今しもあろかなるべきなら
ねば、かの人も思ひ宣ふめるやうに、古への御かはりとなずら
へ聞えて、かう思ひ知りけりと見え奉る節もあらばや、とは思
せど、さすがに、とやかくやと、かたぐに安からず聞えなし
給へば、中若は苦しう思されけり。

庭とら本

たゆみなく時節に相應な衣裳を絶えず數寄を凝して調へて著

十四になり給ふ年、これから此卷の年立、薰廿四、匂宮廿五。他事なく、他事を放擲して御裳著の準備に取掛つて。

女御夏ごろ、椎本卷の夏の事、分である。八六頁。行かれた時

こよなく藤壺が亡くなられて實に物淋しい事だなあ。大方さるまじき悲しかりさうもない關係の女官までも、一通り思出の種としないものはなし。大方は「偲び聞えぬはなし」にかゝる。

御四十九日、女御の中陰が過ぎると同時に女二宮をそつと禁中にお呼寄せになつた。

御母方とても以下今上の御心づかひ。女二宮の母女御の御實家といつても、後見として力にならぬ程の御伯父など、これといふしつかりした人もない。大藏卿、大藏省の長官で正四位下相當。修理職の長官で從四位下相當。格別世間の信望も厚い譯でもなく、あまり身分の高くないこれらの人々を力にして居られた所で、女といふものゝ氣の毒だ。多かりさうなもの。御心一つなるやうに心配の仕手は御自分お一人の様に思召しに上つても、氣の採めた事である。うしろひ果てて、菊は色の變り始めた頃を賞翫したのである。古今秋下一秋をおきて時こそありけれ、菊の花うつるふからに色のまされば。

たゆみなく時々につけつつ調へ好みで、今めかしく故々しきさまにもてなし給へり。
花やかな奥ゆかしい生活をイニナシ

女二宮の事、十四になり給ふ年、御裳、著せ奉り給はむとて、春よりうち始めて、他事なくおぼし急ぎで、何事もなべてならぬさまにと思しまうく。
故左大臣の時代から

と探しいでつつ、いみじく營み給ふに、女御夏ごろ物怪に煩ひ給ひて、いとほかなく亡せ給ひぬ。
御準備のかひもなく

をうちにも思し歎く……心ばへなさけしく、なつかしき所おはしつる御方なれば、殿上人どもも、「こよなくさうざうしかるべきわざかな」と惜しみ聞ゆ。大方さるまじききは女官などまで、偲び聞えぬはなし。
女二宮

宮はまして若き御心地に、心細う悲しく思し入りたるを、聞召して、心苦しうあはれに思召されるれば、御四十九日過ぐるままた、忍びて參らせ給へり。
女御の里から

黒き御ぞにやつ
御母女御の喪に服して

れておはするさま、いとどらうたげにあてなる氣色まさり給へり。御心ざまも、いとよく大人び給ひて、母女御よりも今すこししづやかに、おもりかなるところはまさり給へるを、うしろ

やすくは見奉らせ給へど、誠には、御母方とても、後見と頼ませ給ふべき伯父などやうの、はかくしき人もなし、わづかに大藏卿、修理の大夫などいふは、女御にも異腹なりけり、殊に

世の覚えおもりかにもあらず、やんごとなからぬ人々を頼もし人にておはせむに、女は心苦しきこと多かりぬべきこそいとほしけれ、など御心一つなるやうに思しあつかふも、やすからざりけり。

お前の菊うつろひ果てでさかりなる頃、空の氣色も、あはれにうちしぐるるにも、まづこの御方に渡らせ給ひて、昔のことなど聞えさせ給ふに、御いらへなども、おほどかなるものから、いはけなからずうち聞えさせ給ふを、

うつくしく思ひ聞えさせ

かやうなる御さまを こんながつ
憐な風趣を理解してかはいが
てくれる人も無い事はあまるま

暫しは 女三宮を源氏に託され
た當座は

いでや飽かずも その事につ
いて人々が朱雀院に不平を訴へる

源中納言 薫は表向きは源氏と
女三宮との間の子である。薫が

優れた人物でこんなな母宮
を世話してゐられるので、母宮

も昔ながらの聲望を持続して、
今も立派に暮してゐられるの

さらずば、もし源氏に嫁がれ
かつたら、意外な事件がいろい

と起つて、自然世の輕蔑を招く
といふやうな事もあつたかも知

れぬ。ともかくも 御自分の御在世中
につけておきたいものだ、と思ひ

宮たちの 薫は内親王の婿にし
ても何等不釣合ではあるまい。

もとより思ふ人 薫は元々大君
といふ愛人は持つてゐるに、し

うな聞き苦しい仕打などはいふや
うな性のやうだが、併し結局は

薫も本妻を迎へずにはゐられな
い。これは宇治大君在世中の話

御基など打たせ 今上が女二宮
と。

花の色 菊の花である。

中務の親王 今上の皇子で明石
中宮腹。

上野の親王 系圖不明。

げに 下の「人に殊なるさまし
給へり」に應ずる詞。

遊びなど 藤壺の喪中で演奏な
ども氣乗りがせず、誠に退屈な

基が面白からう。遊びにはこの
いたづらに日を送る 文集十六

「送春唯酒銷日不_レ過_レ基」
いつもかやうに 今上はいつも

ておこなれるのが癖になつて居る
ので、薫は又例の事と心得てゐ

よき賭物は 悪い賭物はあるわ
けだが、女二宮を思召しての御
言葉である。

給ふ。かやうなる御さまを見知りぬべからむ人の、もてはやし
聞え・むも、などかはあらざらむ、朱雀院の、女三宮を源氏に姫宮を六條の院

に譲り聞え・給ひし折の定めどもなど思し・いづるに、暫
しは、いでや飽かずもあるかな、さらでもおはしなまし、と聞

ゆる事どもありしかど、源中納言の、人より殊なる有様にて、
斯くよろづを後見奉るにこそ、そのかみの御覺え衰へず、やん

ごとなきさまにてはながらへ給ふめれ、さらずば御心より外な
る事ども・出で来て、おのづから人にかるめられ給ふこともや

あらずし、など思し續けて、女三宮を・伊にはかなき世にともかくも御覽
ずる世にや思ひ定めまし、女三宮の例を其儘踏襲してと申し寄るには、やがてそのつ

でのままたに、この中納言より外に、よろしかるべき人又なかり
けり、宮たちの御かたはらにさし並べたらむに、何事もめざま

しくはあらじを、もとより思ふ人もたりとて、聞きにくき事な
ど、うちまじらはずはたあめるを、遂にはさやうのことなくてし

もえあらじ、本妻のさまらぬ前に女二宮の事をほめかして見ようかしらさらぬさきに、さもやほのめかしてまし、など折

折おぼしめしけり。
御基など打たせ給ふ。暮れゆくままたに、時雨・をかしき程に

・うちして花の色も夕ばえしたるを御覽じて、人召して、今上只
今殿上に・たれ／＼か」と問はせ給ふに、侍臣中務の親王、上野

の親王、中納言源の朝臣・さぶらふ」と奏す・今上中納言
の朝臣こなたに」と仰言ありて、薫が参り給へり。げに斯く取り分

きて召し今上がいづるもかひありて、遠く・かをれる匂ひより始め、
人に殊なるさまし給へり。今上今日の時雨、常より殊にのどかな

るを、遊びなどすさまじき方にていとつれ／＼なるを、いたづ
らに日を送るたはぶれにても、これなむよかるべき」とて、基

盤召出でて、御基のかたき相手に召寄す。いつもかやうに・けち
かくならしまつはし給ふにならひにたれば、さにこそはと思ふ

に、今上よき賭物はありぬべけれど、容易には負けないぞの意かる／＼しくはえ渡すまじ

昔ありけむ香のけぶり 反魂香の事一六九頁。
やんごとなき方 早く女二宮と結婚したいなどと急ぐ氣はな

左の大きい殿には 夕霧左大臣は句宮と六君との結婚を急いで。さればよ 豫想の通りだ。いかでかは こんな事にならな
い管はないのだ。数ならぬ どうせつまらぬ自分
だから、必ず世間の物笑ひにな
るやうなつらい事が起るにちが
ひないと思つて来たのだ。送つて来た程 六君が出来
俄に變り給はむ程 六君が出来
た爲に今迄と打つて變つて冷淡
にされた時には、どうして安心
してゐられよう。ただ人の夫婦とちがつ
てまるで縁が切れてしまふとい
ふやうな事はないにしても、
なほいと憂き身 やはり自分
不幸な身の住みに舞ひ戻らねば
ならぬのだらう。やがて跡絶え
してしまふよりは宇治にかへつ
て出戻り者よと思はれるのも
一層物笑ひだ。故宮の宣ひおきし 推本卷五八
頁の言におぼろげの山里をあく
がれ給ふな一などあつた事

故姫君の 姉君は考へる事仰し
やる事萬事がとりとめのない頼
りない口のきふ方であつたが、
すばらしいものであつた。點は

又かやうに 私と同じやうな苦
勞を嘗められたかも知れない。
それをいと深く 大君はその點
を深く慮つて、決してそんな目
にはあふまいと斟酌して、あれ
だして、これやと薫から遁れる
に、尼にもならうとされたの

何かは 下の「見え奉らむ」に
係る。悲しんでも恨んでも仕
がなないのだから、こんな様子
何で句宮に見られようや、と中
君は胸一つに辛抱して。
常よりもあはれに 六君の事を
酌から。酌から。

らむ人は、心もとまりなむかし、昔ありけむ香のけぶりにつけ
てだに、今一たび・見奉るものにもがな、とのみ覺えて、や
んごとなき方さまに、いつしかなどは急ぐ心もなし。

左の大きい殿には急ぎ立ちて、八月ばかりにと聞え給ひてけり。
二條の院の對の御方には、聞き給ふに、さればよ、いかでかは、
數ならぬ有様なめれば、必ず人笑へに憂きこと出でこむものぞ
とは思ふく、過ぐしつる世ぞかし、あだなる御心と聞きわたり
しを、頼もしげなく、思ひながら、目に近くては、殊につらげ
なる事も見えず、あはれに深き契りをのみし給へるを、俄に變
り給はむ程、いかがは安き心地はすべからむ、ただ人の中らひ
などのやうに、いとしも名残なくなどはあらずとも、いかに安
げなきこと多からむ、なほいと憂き身なめれば、遂には山住み
に歸るべきなめり、など思すにも、やがて跡絶えなましよりは、
山賤の待ち思はむも人笑へなりかし、かへすくも故宮の宣ひ

に背いて山莊を見捨てたわが輕率を
おきし事にたがひて、草のもとをかれにける心がるさを、恥か
しうもつらくも思ひ知られ給ふ。故姫君の、いとしどけなく、
物はかなきさまにのみ何事をもおぼし宣ひしかど、心の底のづ
しやかなる所はこよなくもおはしけるかな、中納言の君の、今
に忘らるべき世なく歎きわたり給ふめれど、もし世におはせま
しかば、又かやうに思すことはありもやせまし、それをいと深
う、いかでさはあらじと思ひ入り給ひて、とさまからさまにも
て離れむことを思して、かたちをもかへてむとし給ひしぞかし、
今御存命ならは吃度尼になつてゐられたに違ひない
必ずさるさまにてぞおはせまし、今思ふに、いかにあもりかな
る御心おきてならまし、亡き御影どもも、我をばいかにこよな
きあはつけさと見給ふらむと、恥かしう悲しくおぼせど、何か
は、かひなきものから、斯かる氣色をも見え奉らむと、忍び返
しつづ、聞きも入れぬさまにて過ぐし給ふ。
宮は常よりもあはれになつかしう起き臥し語らひ契りつつ、こ

行くさきの 將來の事ばかりを
夢見續けて居たに。結
人は心にも大君は結
を望まぬやうに見せて
その癖一概にはねて
うとも思つてゐられず
の氣休めに、自分も同
だとの口實で、望みも
の方に私を振向けたの
大君の魂膽を覆へたか
つて、急に句宮を中君
た譯であつたのだ。

率てありき 薫は色々工面して
句宮を宇治に案内した
らしくもない氣狂ひじ
を思ひ出すにつけても
宮もさりとも句宮だつ
くら何でもあの當時の
の有様を思ひ出して下
私への聞えを少しは憚
今はその折の喉元を過
では、あの當時の苦勞
など、一つもありがたい
しやらないやうだ。

わが誠に 薫といふ人は、
が本當に極端に一事に
る性癖の人だから、人
非常な非難に見たい氣
るのであらう。

ただかの御ゆかり それは全
大君の妹と思ふから、
今はとたり給ひないの
下にも、跡に残る妹を
よろづは思はずなる。以
臨終の折は、思はずなる
ては何も折の詞。薫の
は中君を薫にとの計畫
なからう事が遺憾だとい
うは「残りぬべき」に
つくは「残りぬべき」に
ふに「残りぬべき」に
心ならず大君をも中君
こなつたのであるから
きし方行く先の人のうへ
薫は自分の事ばかりで
君が此の世をまぢきなく
るであらう事までも考へ
なげのすさみに 薫が氣ま
るに關係して身近く使
宿 木

む事は、初めより思ひし本意なかるべしと憚りつつ、
も大君から同情されて自分に打解けて下さる様子が見たいものだ
にしてすこしもあはれと思はれて、打解け給へらむ氣色をも見
むと、行くさきのあらましごとのみ思ひつづけしに、人は
心にもあらずもてなして、さすがに一方にしもえさし放つまじ
う思ひ給へる慰めに、同じ身ぞといひなして、本意ならぬ方に
おもむけ給ひしがねたく怨めしかりしかば、まづその心おきて
をたがへむとて、急ぎせしわざぞかしなど、あながちに女々し
う物ぐるほしく率てありきたばかり聞えし程思ひいづるも、い
とけしからざりける心かなと、かへすゝぞくやしき。宮も、
さりとも、その程の有様思ひいで給はば、わが聞かむところを
もすこしは憚り給はじや、と思ふに、いでや、今はその折の事
など、かけても宣ひいでざるかし、なほあだなる方に進み、
移りやすなる人は、女のためのみにもあらず、頼もしげなく、
かるゝしき事もありぬべきなめりかし、など憎く思ひ聞え給

ふ。 以下地の評 わが誠にあまり一方にしみたる心ならひに、人はいとこよ
なくもどかしく見ゆるなるべし。 大君を亡くして後 かの人を空しう見奉りなし。
・てしのもち、思ふには、御門の御むすめを賜はむとおぼしお
きつるも、嬉しくもあらず、この君を得ましかばと覺ゆる心の
月日に添へてまさるも、ただかの御ゆかりと思ふに、思ひ離れ
がたきぞかし、兄弟といふなかに、限りなく思ひかはし給へ
りしものを、今はとなり給ひにし果にも、とまらむ人を同じ事
と思へ、と・て、よ・る・づ・は・思・は・ず・な・る・事・も・な・し、ただかの思
ひおきてしさをたがへ給へるのみなむ口惜しう恨めしきふし
にて此の世には残りぬべき、と宣ひしものを、あまがけりても、
かやうなるにつけては、いとどつらしとや見給ふらむ、なごつ
くゝと、人やりならぬ獨寝し給ふ夜なくは、はかなき風の
あとにも目のみさめつつ、きし方行く先の人のうへさへ、あぢ
きなき世を思ひめぐらし給ふ。なげのすさみに物を言ひ觸れ、

さるはかの君だちの程に劣るまじききはの人々も、
 宇治の姫君達にも劣らぬ程の身
 分の婦人達で、御時勢柄今では
 零落しておびしい生活を取つて
 房としてお屋敷に引取つて女
 さういふ人達も多いたりなど、
 今とは世をいつて特別に心引
 にかれる足手纏ひになる程の事
 心なくて居つたものだと深く用
 初一念が挫けてしまつた大君故
 得手勝手な心だ。

はかなげにて、たよりない姿で
 といつたのは、蔓草だからであ
 る。朝顔は常なき花の色なれや、
 一朝顔は常なき花の色なれや、
 くるま咲きてうつろひにけり、
 無常の世態に引きくらしく思
 れるのであらう。

北の院 中君の居る二條院は薰
 の居る三條院の北に當るから斯
 くいふ。

さばれ 句宮の御在宅か否かは
 どうでもよいの意。

花のなかにまじり 朝顔を折ら
 うとして、
 怪しう 「なまめかしう恥かし
 げにて」を修飾する。

今朝のまの朝顔といふものは
 おく露の消えずに居る間だけ
 命と頼んである美な花だとは見
 つつも、今朝の美さは又格別だ
 から、その一時の色を賞翫しよ
 うか。
 はかな 歌を受けた詞で、朝顔
 もはかないものだが、自分の心
 女郎花をば 古今秋上「女郎花
 憂しと見つつぞ行き過ぐる男山
 にし立てりと思へば」

けぢかく使ひならし給ふ人々のなかには、おのづから憎からず
 思さるるもありぬべけれど、誠には心とまるもなきこそさわや
 かなれ。さるは、かの君だちの程に劣るまじききはの人々も、
 時世に随ひつつ衰へて、心細げなるすまひするなどを、尋ね取
 りつつあらせなど、いと多かれど、今はと世を、背き離
 れむ時、この人こそと、取立てて心とまるほだしになるばかり
 の・事はなくて過ぐしてむ、と思ふ心づかひ深かりしを、いで
 さもわろくわが心ながらねぢけてもあるかな、など、常よりも
 やがてまどろまず明かし給へるあしたに、霧の籬より、花のい
 ろ／＼面白く見えわたるなかに、朝顔のはかなげにてまじり
 たるを、なほ殊に目とまる心地し給ふ。明くるま咲きてとか、
 常なき世にもなずらふるが心苦しきなめりかし。格子もあげな
 がら、いと假初に打臥しつつ、明かし給へば、この花の開く
 程をも、只一人のみぞ見給ひける。

人召して、北の院に參らむに、事々しからぬ車さし出でさせ
 よ」と宣へば、宮は昨日よりうちになむおはしますなる。
 べ御車ゐて歸り侍りにき」と申す。さばれ、かの對の御方の
 悩み給ふなる、とぶらひ聞えむ。今日はうちに參るべき日なれ
 ば、日たけぬさきに」と宣ひて、御装束し給ふ。出で給ふま
 庭に下りて、おりにて花のなかにまじり給へるさまも、殊更に艶だち色め
 きてももてなし給はねど、怪しう、只打見るに、なまめかしう
 恥かしげにて、いみじう氣色だつ色好みどもになずらふべくも
 あらず、おのづからをかしうぞ見え給ひける。朝顔を引寄せ給
 ふに、露いたうこぼる。

「今朝のまの色にやめでむおく露の消えぬにかかる花と見るく
 はかな」など獨りごちて、折りて持給へり。女郎花をば見過ぎ
 てぞ出で給ひぬる。明け離るるままた、霧立ちみちたる空をか
 しきに、女どちはしどけなく朝いし給へらむかし、格子妻戸な

朝まだき 引歌のあるべき語勢である。

猶めざましう 薫はやはりおどろいた方だ。稱讚の語である。

宮の忍びたる 女房達の心。

あいなく 若い女房達などはつ
まらぬ瞳をしてゐる。驚きがほ
に拘らず、女房達は別に慌
てた様子もなく、程よく起ち居
てた。これにさぶらへと 此處にお坐
りなさいとお許し下さつた。梅
は人間らしい扱ひを受けてゐる
やうな氣がします。併して斯様
に御簾の外にほつたかして度々
かふるのなれませぬ。北おもて
北おもてなど北面といつたや
うな隠れ部屋なんです。私の
休息所は併しそれ全くあいな
たの御心次第なのですから、私
から愚癡を申上げる筋のもので
もありませぬ。

なほあしこもとに やつばし御
簾のお側迄出て薫とお話遊ば
せ。

やうく 「すこしづつ薄らぎ
て云々に係る。前には直接話
すのが變にきまりがわるかつ
たのだが、今では其點が段々薄
らいで、馴染がついて来た。

こまやかに 「教へ慰め聞え給
ふ」を修飾する。世の中のあるべきやう 世の中
に處する道。恰も兄弟といつた
兄弟やうの親しい關係の人がする
やうな親しい關係の人がする
あらうやうに。簾垂も引きあげて 簾垂の中に
顔をさし入れて中君とさしむか
ひになりたく。自分やうな眞
なほ世の中に 女の事で苦勞しな
い男世間にはあり得ない譯
のものだらう。

ど打叩き咳拂で女房達を起すのも具合がわるいこわづくらむこそうひくしかるべけれ、朝まだきあまり早く來過ぎして
だき來にけり、と思ひながら、人召して、中門のあきたるより
見せ給へば、「御格子ども皆参りて侍るべし。女房の・けはひな
どし侍りつ」と申せば、ありて、霧の紛れにさまよく歩み入り
給へるを、宮の忍びたる所より歸り給へるにやと見るに、露に
うちしめり給へるかをり、例のいとさま殊に匂ひくれば、人々「猶
めざましう・おはすかし。心をあまりおちついていらつしやるのが
など、あいなく若き人々などは聞えあへり。驚きがほにもあら
ず、よき程にうちそよめきて、御しとねさし出でなどするさま
も、いとめやすし。薫これにさぶらへと許させ給ふ程は、人々
しき・心地すれど、なほ斯かる御簾の前にさし放たせ給へ
るうればしさになむ、しばくもえさぶらはぬ」と宣へば、女房
「さらばいかかは侍るべからむ」と聞ゆ。薫「北おもてなどやう
の隠れ・ぞかし、斯かる古人などのさぶらはむにことわりなる

休み所は。それも又只御心なれば、愁へ聞ゆべきにも侍らず」
とて、長押におしかかりておはすれば、例の人々、「なほあしこ
もとに」などそそのかし聞ゆ。もとより、けはひはやりかに雄
雄しくなどは物し給はぬ人がらなるを、いよくしめやかにも
てなしをさめ給へれば、今はみづから聞え給ふことも、やうや
ううたてつつましかりし方すこしづつ薄らぎて、おも馴れ給ひ
にたり。惱ましう思さるらむさまも、「いかなれば」など問ひ聞
え給へど、はかくしくも御いらへ聞え給はず、常よりもしめ
り給へる氣色の心苦しきも、あはれに推し量られ給ひて、こま
やかに、世の中のあるべきやうなどを、兄弟やうの者のあらま
しやうに、教へ慰め聞え給ふ。聲なども、わざと似給へりとも
覺えざりしかど、怪しきまでただそれとのみ覺ゆるに、人目見
苦しかるまじくば、簾垂も引きあげて、さし向ひ聞えまほしく、
打惱み給へらむかたちゆかしう覺え給ふも、なほ世の中に物思

心に思ふ事あり 氣苦勞をした
り身の不遇を歎いたりするとい
つたやうな生活ぶりはないで
暮せるこの世と自ら信じて居り
ましたのにも。自ら求めて悲しい事
心から自ら求めた事、さう
阿呆らしくも又残念な事、さう
が、それをあつて居ても始まらぬ事
で、考へて居ても始まらぬ事
官位などいひて 世間の人は官
位などを問題にして重大事と考
へてゐるのでも當然不平が起つて
歎いたりしますが、私の物思ひ
事では、それよりもすこし罪が深い
色あはひ 色合ひ。
よそへては、大君の心持では、
身代りとしてあなたを私に下さ
る事を約束しておかされたかや
うに推察します。おたのめを
大君に思つて私物にあなたを
たのめをやらせ、私物にあなたを
君の歌には露を自分に見えが、
んであるのを見分けるが、
は「おきし」の枕詞と見るべき
である。
殊更びてしも 別に落すまいと
注意してゐられた譯でもない
消えぬまに 露の消えぬ間に枯
れはしまつた。この朝顔の花のや
うには、生きた世を去つた大君よ
うにも、生きた世を去つた大君よ
ないものです。

はぬ人もえあるまじきわざにやあらむ、とぞ思ひ知られ給ふ。
私は一塵の人間らしく榮華な生活は出来なくて
人々しくきらくしき方には侍らずとも、心に思ふ事あり、
歎かしく身をもてなやむさまになどはなくて過ぐしつべきこの
世とみづから思ひ給へしを、心から、悲しき事もをこがましく
くやしき物思ひをも、かたぐに安からず思ひ侍るこそいとあ
いなけれ。官位などいひて、大事にすめることわりの愁へにつ
けて歎き思ふ人よりも、これや・今すこし罪の深さはまさるら
む」など言ひつつ、折り給へる花を、扇に打置きて見居給へる
が、やうく赤みもてゆくも、なか／＼色・あはひをかしう
見ゆれば、やをらさし入れて、
よそへてぞ見るべかりける白露の契りかおきし朝顔の花
殊更びてしももてなさぬに、露を落さで持給へりけるよと、
かしく見ゆるに、置きながら枯るる氣色なれば、
「消えぬまに枯れぬる花の儂さにおくるる露は猶ぞ勝れる
置くをひびかせて露の縁語に扱つてある
露がおいた儘
御簾の中に
朝顔
中君

今すこし眺めのみ 秋は他の季
節よりも一段と物思ひの深くな
るばかりで退屈ですから、先達
て宇治に行つて参りました。
庭も籬も 古今秋上「里は荒れ
も人のふるに宿なれや庭も籬
も秋の野らなる」
故院の源氏の薨去後は、源氏
が晩年の三年程隠棲してゐられ
た嵯峨の院にも、私又本邸なる六條
院へやうが、ありませんでした。
かの御あたりの 源氏の側近に
仕へて居つた人々は、身分の高
下を問はず誰も心から悲歎に
下へ居つたので、四方の町に住
んで居られた婦人達も。
物覚えぬ心に 分別を失つた心
に引かれて山や林の中に迷ひこ
み落着かない田舎者になつたり
など。

何を頼りの私の命でせう
何にかかされる」と、いと忍びて言も續けず、つつましげに言ひ
消ち給へる程、なほいとよく似給へる。かな、と思ふにも、
まづぞ悲しき。秋の空は、今すこし眺めのみまさり侍
るつれ／＼の紛らはしにもとて、さいつ頃宇治に物してはべり
き。庭も籬も誠に。荒れ果てて侍りしに、堪へがたきこと
多くなむ。故院の亡せ給ひてのち、二三年ばかりの末に、世を
背き給ひし嵯峨の院にも、六條の院にも、さしのぞく人の、心
をさめむ方なくなむ侍りける。木草の色につけても、水の流れ
に添へても、涙にくれてのみなむ歸り侍りける。かの御あたり
の人は、上下心浅き人なくなむ惑ひ侍りけるままに、かた
つどひ物せられける人々も、皆所々にあかれ散りつつ、おの
の思ひ離るるすまひをし給ふめりしに、はかなき程の女房など
は、まして心をおちつけやうもなく、
まかせつつ、山林にゆきまじり、すすろなる田舎人になりなど

ともかくも どうなりとお指圖に随つて取計らひたいと存じま

このうへも 薫のなさる上に更に中君も經や佛などを供養なさ

事ありがほ 中君との間に深い關係でもありさう故。どちらへ上りま

なぞや人やりならぬ 何で自分

なぞや人やりならぬ 何で自分

又いかがおぼしおきつらむ。ともかくも定めさせ給はむに従ひ

べき」と宣へば、右京「今日はまかでさせ給ひなむ」と申せば、薫さ

左の大殿の夕霧。六條の院の東の御殿。落葉宮の待ち聞え六君の婿として句宮をお待ち申してゐられるが。いとしも御心にこの縁組はもろく句宮があまり進んでおられないのだから、どうなんだから、来られないのだからうかた心配して、使を以て促された所

思す人 二條院には中君といふ愛人があられるからだと夕霧はむしやくしやるからだと夕霧は月だに宿に入るものを雲のよそ今なむとも二條院から六君の許へ出掛けて、今六君の所へ行へ今おはすとも中君に見えんと禁中よりすぐ中君におはすと給へり。かく中君に隠し給ふは隔心あるやうに中君の思はざり、いかゞ物思ひ給はんれば、中々今なんとも見えじと思し、夕霧の方より内より出で給ふて二條院におはします故をこゝにて月を眺めて二人で月を眺めておいらたになつた所へ夕霧から使

つれなき 平氣を装つてゐられる事故。殊に聞きもとがめぬ夕霧から様子が、格別氣にもかけないさすがにかれも氣は進まぬなは出かひしな。文集十四贈月な見給ひそよ。内「莫下對二月明」思「往事」損三君顔色「減」二君年「古今雜上」大方は月をよめでこれぞこの積れば、空なれば萬葉十一「たもとほり往き箕の里に妹を置きて心空なり土はふめども」によつていつたもしいの妹をばはしたのくのが苦しいの意を表はしたのである。寢殿へ句宮は二條院の寢殿、中君は西の對屋に住んでゐられる。中君は西の對屋に住んでゐられる。心曇きものはさては自分も嫉妬の心を持つてゐるのかと中君は自分で自分の心に愛相をつかしたのである。心に愛相をつかしたのである。いと斯く心にしみて、あの當時は今のやうにしみて、世を愛きものと感じた事もなかつたのうち續き、引續いて父宮や姉君に死別した當時は、片時も世に思はれず、へて居られようとも

左の大殿には、六條の院の東の御殿を磨きしつらひて、限りなくよろづを調へて待ち聞え給ふに、十六日の月やうくさしあがるまで心もとなければ、いとしも御心に入らぬことにて、いかならむと安からずおぼして、案内し給へば、此この夕つ方うちより出で給ひて、二條の院になむおはしますなる」と人申す。思す人持給へればと心やましけれど、今宵過ぎむも人笑へなるべければ、御子の頭中將して聞え給へり。

夕霧の心 大空の月だにやどるわが宿に待つ宵過ぎて見えぬ君かな。宮は、なか／＼今なむとも見えじ、心苦し、と思して、うちに六君方へ行く積りで、御文聞え給へりける。御返りやいかがありけむ、なほいとあはれに思されければ、忍びて渡り給へりけるなり。いとほしければ、よろづに契りつつ、慰めかねて、もろとも月を眺めておはする程なりけり。女君は、日頃もよろづに思ふ

こと多かれど、いかで氣色に出ださじと、よろづに念じ返しつ、つ、つれなきさまし給ふことなれば、殊に聞きもとがめぬさまに、おほどかにもてなしておはするさま、いとあはれなり。中將の參り給へるを聞き給ひて、さすがにかれもいとほしければ、出で給はむとて、今いと疾く參りこむ。獨り月な見給ひそよ。心空なればいと苦し」と聞えおき給ひて、なま傍痛ければ、隠れの方より寢殿へ渡り給ふ御うしろでを見送るに、ともかくも覚えねど、ただ枕の浮きぬべき心地のすれば、心憂きものは人の心なりけり、と我ながら思ひ知らる。をさなき程より心細くあはれなる身どもにて、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし。一所を頼み聞えさせて、さる山里に年經しかど、只いつとなくつれづれにすごうはありながら、いと斯く心にしみて世を憂きものとも思ひ知らざりしに、うち續きあさましき御事どもを思ひし程は、世に又とまりて片時經べくも覺

人の思ひたりし句宮に引取ら
れて直に棄てられし事と
思つて、人並らしい相當の生活をし
て、人並らしい相當の生活をす
るやうになつたのだと思はな
い。長續きの事とは思はな
い。見る限りは、逢つてゐる間は憎
らしい所もないお氣立お仕向な
らぬ。段々苦勞も薄らいで來た
のに。この節の、我が身のつらさは、切
やうにもなく、もうこれが縁の切
目だといふやうな氣がする。切
さりとも、時々は歸つて來て下さ
り、管はなすに慰めておいて
ぬ。今宵斯様に私を捨ててお
出で行かれたつらさに、居れば
おのづから自然句宮との間も
そのやうになるだらうなど、と
諦らめて思ふにつけ、ばなら
らうと思ふにつけ、古今雜一「わ
娘捨山の月のみ」の歌、捨山に
が心慰めかねつて、更科や、葉
照る月を見て、「慰めかねて、葉
代用語につかた、慰めかねて、葉
の音する住居より、孟津抄「こ
の松風は宇治にて聞きしむ、葉
の音に、本などよりにし事もあり
し。宇治に椎の木ありけるなるべ

山里の松の蔭にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき
つた。これ程しむ秋の風はなかり
きし方は、實は宇治ではこれ以
上の事は忘れてしまはれたのだら
う。月見るは、樂天の詩前出。後撰
戀二「獨寝のわびしきままに起
きぬつづつ月をあはれと忌みぞか
ゆゆしう」大君が逝去前に何も
召上らなかつたので、食事な
い追憶がどいふ事には忌はし
い。つたのである。いやは世の中だ。
心憂の世や、いやな世の中だ。
さりとも、捨くられなざるや
此儘中君が捨てられなざるや
な事はあるまい。何れもさるや
さいへど、何れもさるや
深い愛情で、始まつた戀は、仲とい
ふものだ。全く切れてしまはぬ
今は、いかにも、かうなつた
今はいかに、かうなつた
せたくない、句宮のなせる儘に任
すのは、見よう、と中君の思召
人には言はせじ、句宮を人の口
から非難させたくない、自分だ
けで恨んで居たいのであらう。だ
そのかみの人々は、大君が中君
事を薫らうとなされた女房達は、

えず、戀しう悲しき事のたぐひあらじと思ひしを、命長くて今
までもながらふれば、人の思ひたりし程よりは、人かずにもな
るやうなる有様を、長かるべき事とは思はねど、見る限りは憎
げなき御心ばへもてなしなるに、やうく思ふ事うすらぎてあ
り經つるを、この節の身の憂さは、言はむ方なく、限りと覺ゆ
るわざなりけり、父宮や姉君には永久にあへないがそれに比べるとひたすら世に亡くなり給ひにし人々よりは、
さりとも、これは時々もなかはとも思ふべきを、今宵斯く見
捨てて出で給ふつらさに、頭の中が無茶苦茶に混亂してきし方行く先皆かき亂り心細くいみ
じきが、自分で自分がどうすることも出来ない程につらいわが心ながら思ひやる方なく心憂くもあるかな、おの
づからながらへば、なんど慰めむことを思ふに、更に娘捨山の
月のみすみのぼりて、夜更くるままた、よろづ思ひ亂れ給ふ。
松風の吹きくるおとも、荒ましかりし山おろしに思ひくらぶれ
ば、二條院はいとどかになつかしうめやすき御すまひなれど、今宵は
さも覺えず、しほ椎の葉のおとには劣りて覺ゆ。

山里の松の蔭にもかくばかり身にしむ秋の風はなかりき
きし方は、忘れにけるにやあらむ。老女房老人どもなんど、「今は入らせ
給ひね。月見るは忌み侍るものを、あさましうはかなき御菓子
をだに御覽じ入れねば、いかにならせ給はむ。」いとあな見苦しや。
ゆゆしう思ひいでらるる事も侍るを。誠に困つた事だいとこそわりなけれ」な
どいふ。若き人々は、「心憂の世や」と打歎きて、若人「い、この御
事よ。さりとも、斯くておろかにはよもなり果て。」さき給はじ。
さいへど、もとの志深う思ひそめつる中、なか名残なからぬもの
ぞ」中君の心には老人の噂若人の噂を聞くに聞きづらくてなどいひあへるも、
いかにもかけて言はざらなむ、ただにこそ見め、と思さるるは、
人には言はせじ、われ獨り恨み聞えむとにやあらむ。「いでや、
中納言殿の、あれ程熱心に御親切を盡して下さつたのにさばかりあはれなる御心深さを」など、そのかみ
の人々はいひ合せて、「人の御宿世の怪しかりけることよ」とい
ひあへり。

いかでめでたきさまに夕霧一
家から立派な婿君だとせひ歓迎
されたいものと氣を張つて。

人の御程 六君の體格は、小柄
で華奢でといつたやうなわけ
なく、程よく發育をしてあら
るやうな氣がするに。いか
いかならむ 六君と云ふ人はど
んな人だらうか、態度は勿體ぶつ
てはきくしくしてゐて、そむ
質も柔和な所がなく、高慢ちき
つたらしい風だらう、そんな女
豫ては想像して居つたのだが實
は。

秋の夜なれど 古今戀三「長し
とも思ひぞ果てぬ昔よりあふ人
からの秋の夜なれば」

對 中君のあられる對屋。
御氣色けしうはあらぬ 句宮が
満足さうにして後朝の文を書い
てゐられるその様子から推し
さうだ、と人々が目引き袖引き
叫きあつたのである。句宮が一切を
平等に愛される御心でも、自然
一方が一方に負かされる事もあ
らう。

皆馴れ仕うまつり 句宮方の女
房は皆今迄中君に親しく仕へて
居つた人々故。はたの者まで總じ
すべてなほはたの者まで居つ
ていまし、さうにして居つ
た。御返りも 六君からの御返事も
御自分の部屋で見たいと句宮は
夜召すが、昨夜一晩だけの夜が
だか、常の夜がれとは違ふので
中君がどうしてゐられるかと氣
にかゝられた。急いで中君方に
臥したるも 中君は寝てゐるの
もすねたやうでいやだから泣
かされたのである。六君の事を思つて泣

ありがたげ 世に稀な美しさ
だ。
こまやかなる 宮はきまりがわ
るく、昨夜の事をこまかくと
説明する事も出来ず、てれかく
しな程の。からだの具合のわる
暑き程の。からだの具合のわる
つたのも暑いせい、涼しくなる
からと思つて今日に及んだのだ
が、まだ晴れくしないのは世
間體もよくない。

句宮は中君を氣の毒には思ひながらも
宮はいと心苦しう思しながら、色めかしき御心は、いかでめで
たきさまに待ち思はれむと、心げさうして、えならずたきしめ
給へる御けはひ、いはむ方なし。待ちつけ、給へる所の有様
も、いとをかしかりけり。人の御程、ささやかにあえかになど
はあらで、よき程になりあひたる心地し給へるを、いかならむ、
物々しくあざやぎて、心ばへも、たをやかなる方はなく、物ほ
こりかになどやあらむ、さあらむこそうたてあるべけれ、など
・思せど、さやうなる御けはひにはあらぬにや、御志あるかな
るべうも思されざりけり。秋の夜なれど、更けにししかばにや、
程もなく明けぬ。

句宮が六君方から 對へはふともえ渡り給はず、暫し大殿籠りて起
歸り給ひても、對へはふともえ渡り給はず、暫し大殿籠りて起
きてぞ御文書き給ふ。「御氣色けしうはあらぬなめり」と、お前
近の女房達 中君がお氣の毒だ
なる人々つきしろふ。女房對の御方こそ心苦しけれ。天の下にあ
まねき御心なりとも、おのづからけおさるる事もありなむかし」

など、ただにしもあらず、皆馴れ仕うまつりたる人々なれば、
安からず打言ふことどもありて、すべてなほねたげなるわざ
にぞありける。御返りもこなたにてこそはと思せど、夜の程の
覺束なさも、常の隔てよりはいかがと心苦しければ、急ぎわた
り給ふ。寝くたれの御かたち、いとめでたく見どころありて入
り給へるに、臥したるもうたてあれば、すこし起きあがりて
おはするに、うち赤み給へる顔の匂ひなど、今朝しも、殊
にをかしげさまさりて見え給へば、あいななく涙ぐまれて、暫し
うちまもり聞え給ふを、恥かしく思してうちうつぶし給へる、
髪のかかりかんざしなど、なほいとありがたげなり。宮もなま
はしたなきに、こまやかなる事などは、ふともえ言ひいで給は
ず、おもがくしにや、句など斯くのみ惱ましげなる御氣色なら
む。暑き程の事とか宣ひしかば、いつしかと涼しき程待ちいで
たるも、なほ晴れくしからぬは見苦しきわざかな。さまく

夜居に 夜居の僧として中君の側につけて祈禱させるべきであつた。斯かる方にも、かうした眞面目な方面の事に、かけても中君が氣にぬくものだが、少しも返事しないのも、今迄に例のない事だから。昔も怪しう、妙に人と違つて以前もこんな煩ふ折もございり治つたのでございませぬもの。か

にせさする事（と）も、怪しう（と）しるしなき心地のみこそすれ。さはありとも、修法は又延（延ばした）べてこそはよからめ。しるしあらむ僧もがな。なにがし僧都をぞ夜居（よる）にさぶらはすべかりける」などやうなるまめごとを宣へば、斯かる方にも言（こと）よきは、心づきなく覺え給へど、むげにいらへ聞えざらむれいならねば、中君昔も、怪しう、人に似ぬ有様にて、かやうの折（あ）は侍りしかど、おのづからいとよく怠るものを」と宣へば、中君いとよくこそさわやかなれ」と打笑ひて、なつかしう愛敬づきたる方は、これに並ぶ人はあらずかしと、思ひながら、なほ又疾くゆかしき方の心いられも立ち添ひ給へるは、御志の、あるかにもあらぬなめりかし。されど見給ふ程は變るけぢめもなきにや、後の世までと誓ひ頼め給ふ事どもの盡させぬを聞くにつけても、中君げにこの世は、いと短かかんめる命待つまも、つらき御心は見えぬべければ、後の・契りやたがはぬ事もあらむと思ふにこそ、なほ懲りず

まに又も頼まれぬべけれ」とて、いみじう念ずべかめれど、忍びあへぬにや、今日は泣き給ひぬ。日頃も、いかで斯く思ひけりと見え奉らじと、よろづに思ひ紛らはしつるを、

とみに、急には泪がとめられ、顔そむけられるので、

あはれなる御有様と、あなたは私思ひ居つたのにか、まだい女とせさらなげれば、あつたでせう、さうな心は、昨夜一晩たのむか、あなただけ、そのお

まに又も頼まれぬべけれ」とて、いみじう念ずべかめれど、忍びあへぬにや、今日は泣き給ひぬ。日頃も、いかで斯く思ひけりと見え奉らじと、よろづに思ひ紛らはしつるを、に思ひ集むる事し多かれば、さのみもえもて隠されぬにや、こぼれそめては、とみにもえためらひ給はぬを、いと恥かしくわびしと思ひて、いたく背き給へば、強ひて引き向け給ひつつ、聞ゆるままに、あはれなる御有様と見つるを、なほ隔てたる御心こそ物し給ひけれな。さらずば、夜の程に思ひ變りにたるか」とて、わが御袖（句宮の袖で中君の涙を）して涙をのごひ給へば、中君夜の間の心變りこそ、宣ふにつけて推し量られ侍りぬれ」とて、少しほほえみぬ。句げにあが君や。をさなの御物いひや。されど誠には心に隈のなければ、いと心やすし。いみじうことえりして聞ゆとも、いとしかるべきわざぞ。むげに世のことわりを知り給はぬこそ、らうたきものからわりなけれ。よし、わが御身になし

夜の更けて 自分は冷遇されて
 而も夜が更けてねぶたがつてゐ
 るのにも、かしのつかれ、あの鄭重
 なもてなしを受けた句宮のお供
 の人々は、さぞかしよい氣持に
 酔つ拂つて、傍に寄り臥してゐる
 事だらうと、それが羨しくつ
 ぶやいたのであらう。昨夜の三日目
 は、たなげなる、昨夜の三日目
 の宴に、ついで、薫が思ひ出したの
 であらう。 夕霧は句宮の母
 方、源氏、夕霧
 源氏、明石中宮
 明石上、今上、句宮
 源氏、明石中宮
 今上、句宮
 これかれ「すすめ聞ゆる」に續
 く。火あかう、かうした場合には燈
 火をほのかに、奥ゆかしくすべき
 である。宮に奉らむと、句宮に差上げた
 いと考へてゐる。姫君は寧ろ、薫
 あげると、自分には、自分の信望が
 萬更ではないのだらう。それ
 しては、自分はいかに、人並は、
 心おごり、自負心もおこる。
 うちの御氣色、女二宮を場はる
 との主上の思召は、本氣なのであ
 る。進まなくては、どうしたものか
 う。

御獨りずみなりや」と、薫方の中門のもとにてつぶやきけるを、薫が聞き
 つけ給ひて、をかしたなむ思しける。夜の更けてねぶたきに、
 かのもてかしづかれける人々は、心地よげに酔ひ亂れて、寄り
 臥しぬらむかし、と羨しきなめりかし。
 薫はわが部屋に
 君は入りて臥し給ひて、きまりわるさうな事だ(宴席に於ける婚の身を想像した言葉)四角はった禮装の
 はしたなげなるわざかな、事々しげな
 夕霧が宴席に頭張つてゐて
 るさましたる親の出でゐて、離れぬ中らひなれど、人々がこれかれ、
 火あかうかがけて、すすめ聞ゆる盃などを、いとめやすくもて
 なし給ふめりつるかな、と宮の御有様をめぐり思ひ出で奉り
 給ふ。げに我にても、よしと思ふ女子をんなを持たらましかば、この
 句宮以外には
 宮をおき奉りて、宮中にもうちだにえ參らせざらまし、と思ふに、誰
 もたれも、宮に奉らむと心ざし給へるむすめは、なほ源中納言
 にこそと、とりくくに言ひならふなるこそ、わが覺えの口惜し
 くはあらぬなめれ、りなさるはいとあまり世づかず、ふるめいた
 るものを、など、心おごりもせらる。主上うちの御氣色あること、

おもだたしき 女二宮の婚にな
 るのは名譽な事であるに、しても
 一體どんなものだらう。
 さすがに 氣が進まないながら
 も女二宮の婚になるのがまんざ
 らいやなのでもないのだらう。
 按察の君 女三宮の侍女。

明け過ぎたらむを 朝おそくま
 で寝て居つたので、誰もかれこれ
 言ふ管もないのに、薫は氣を
 める。按察の君は、急いで、
 ので、按察の君は、急いで、
 打渡し、数ならぬ私如きは世間
 一帯からあなのお相手をしな
 まな、か逢ひそめて、かやうに
 りなれようとは、私の名にか、
 ります。薫は、早く、起き出たの
 恨んだ。薫は、早く、起き出たの
 深からず、私に、急ぎ起さるの
 表面は、冷炎、私に、急ぎ起さるの
 す。深からず、私に、急ぎ起さるの
 深しと宣はむ 愛情が深いと仰
 のし、つた所であつても、ならぬ
 のし、つた所であつても、ならぬ
 仰し、つた所であつても、ならぬ
 むし、つた所であつても、ならぬ

誠におぼしたらむに、斯くのみ物憂く覺えば、いかがすべから
 む、おもだたしき事にはありとも、わが心ながらいかがはあ
 らむ、いかにぞ、女二宮が大君に故君にいとよく似給へらむ時に、いと嬉し
 からむかし、と思ひ寄らるるは、さすがにえもて離るまじき心
 なめりかし。薫は例の寢覺がちななるつれづれなれば、按察の君とて、
 人よりはすこし思ひまし給へるが局におはして、その夜は明か
 し給ひつ。明け過ぎたらむを、人の咎むべきにもあらぬに、苦
 しげに急ぎ起き給ふを、ただならず思ふべかめり。
按察打渡し世に許しなき關川をみなれそめけむ名こそ惜しけれ
薫が按察に對していとほしければ、
といとをかし深からず上は見ゆれど關川の下の通ひは絶ゆるものかは
 深しと宣はむにてだに頼もしげなきを、このうへの淺さは、い
 とど心やましう覺ゆらむかし。妻戸を押しあけて、八月誠は。こ
十六夜の空を見給へ。こんなものははれな月夜をどうして無頓着顔に眺めさせずに寝て明かされようか
 いかでかこれを知らずがほにては明かさむとよ。

何事も 薫の記憶をたどつて比
較して見ると、中君の様子が萬
事宇治にあられた時よりもずつ
と人物が上つたやうに思はれ
る。何かは いや何のく。何も心
配はいらぬ。私を頼もし人にしたに
しても。私を頼もし人にしたに
忍びつつ 人目を忍ぶ仲ながら
も、又他にこれ以上愛する女は
ないといふわが心の落着き場所
ではあらう。

さばかり 薫といふ人はあんな
に分別ありげに賢人ぶつてゐら
れるけれど、一體に男といふ
ものにはいさなだ。亡き大君
に對する悲しさは、それは悲し
い。でも仕方のない事ではな
か。今度の場合は、物思
ひといふ物思ひのありたけをし
盡されたのであつた。

後見の 中君を世話するといふ
氣持はなくなつて。
日頃には 數日中君方に無沙汰
したの。何のく、恨んでも仕
何かは 宇治へ歸りたいと思
ひ立つにつけても、杖柱と頼む
山里にと、いやな料簡を持つて
ゐられたのだ。

世の中いと所せう 身の置き所
もないやう感ぜられて。

日頃の意り 久しい間の御無沙
汰などを言葉盡しておわびに
なる。

打解けぬ 句宮は窮屈な六君の
所に見ると、萬事が氣樂で懐し
く思はれるので。
斯くの 男といふものは皆か
う口先のうまいものかしらと、
しつこく言ひ寄つて來られた人
の事も頭に浮んで。
年頃あはれなる 年來薫を親切
だがお方だと思ひ續けて來たか
だ。懸想といふやうな意味が
あつて、折角の親切もけし
らぬ事と思ふので、將來につ
ての句宮のお約束は、あてに
なるまいと思ひながら、少し
は耳も傾けられた。

まに心にかかりて、やりきれない心持であるわびしく覺ゆ。何事も、古へにはいと多く
まさりて思ひ出でらる。以下薫の心何かは、この宮かれ果て給ひなば、我
を頼もし人にし給ふべきにこそはあめれ、さうなつたにしても世間はれてしまひさても、あらはれて
心安きさまにはえあらじを、忍びつつ又思ひます人なき心のと
まりにてこそはあらめ、中君のただこの事のみつと覺ゆるぞ、
けしからぬ心なるや。以下草子地さばかり心深げにさかしがり給へど、男
といふものの心愛かりけることよ。亡き人の御悲しさは、いふ
かひなき方にても、いとかう苦しきまではなかりけり。中君の事これは、
よろづにぞ思ひめぐらされ給ひける。「今日は宮わたらせ給ひぬ」
など人のいふを聞くにも、後見の心は失せて、胸うちつぶれて、
いと羨しう覺ゆ。
句宮 宮は、日頃になりにはけるは、わが御心さへ恨めしうおぼされて、
俄に渡り給へるなりけり。以下中君の心何かは、心隔てたるさまにも見え奉
らじ、山里にと思ひ立つにも、頼もし人に思ふ人も、疎ましき

心添ひ給へりけり、と見給ふに、世の中いと所せう思ひなられ
て、猶いと憂き身なりけりと、生きてゐる間だけは成るやうにしておとなしくしてゐようとただ消えせぬ程は、あるにまか
せて、おいらかならむ、と思ひ果てて、いとらうたげに、素直な態心う
つくしきさまにもてなして居給へれば、いとどあはれに嬉しく
思されて、日頃の怠りなど、限りなく宜ふ。中君のさま御腹も少しふくら
かになりたるに、かの恥ぢ給ふしるしの帶の引きゆはれたる
程など、いとあはれに、誰かの人をまだ斯かる人をけぢかくても見給はざ
りければ、珍らしくさへ思したり。打解けぬ所にならひ給ひて、
よろづの事心やすくなつかしう思さるるさまに、親切らしい事をおろかならぬ
事どもを、盡きせず宣ひ契るを聞くにつけても、中君の心斯くのみ言よ
きわざにやあらむと、あながちなりつる人の御氣色も思ひ出で
られて、年頃あはれなる御心ばへとは思ひ渡りつれど、斯かる
方さまにては、あはれをもあるまじき事と思ふにぞ、この御行
く先の頼めは、どうかかといでやと思ひながらも、すこし耳とまりける。

さても 以下中君が薫の事を思ふのである。それにしては、御簾の内に入つて来ておいて、御簾の内に大君とは直接の關係なしに終られた事などは、類例のない事ではあるが、それでも矢張氣を許してはならない筈の物であつた。薫がそのひまに追つて来る事もあらうかと。過ぎぬる方今までより多少の態度をなされるので。

しるき匂ひ 薫の移香たる事明白である故に。

殊の外に まるで見當運ひの疑でもないので。屹度薫が中君に必ずさる事は、やうな事はあるだらう。よもや無關心では居るまいと今迄疑ひ續けて居つたのだ。さるは、でも匂宮に疑はれまいと中君は下着の單衣なども着換へておられたのだが、妙に案外身内にしみついて居つたのであ

かばかりにては こんなに深く香がしみついてゐるからには、何もかもしてしまつたのだらう。

思ひ聞ゆるさま 私の愛しやうは又格別であるのに、棄てられた位なら、つそちらから棄ててやらうなどと、そんな態度で夫婦分れるのは、賤しい者の事です。六帖四伊勢一人よりは、我こそ先に忘れなめつれなきをし何か頼まむ。

ともかくも 中君が何とも返事はなさらぬ、その事すら匂宮に又人に、あなたに馴染まれたその移香の深さを味はつて、深くあなを恨んで居りますよ。いかがは「いかがは恨み給ふ」などの意。

みなれぬる 長年連れ添つて来た夫婦仲と思つて信賴して居つたので、これは位のことでは別うか。斯かれば、斯様に可憐だからこそ薫が中君に熱中するのだ。

さても、あさましうたゆめくして入り來たりし程よ、昔の人に疎くて過ぎにし事など語り給ひし心ばへは、げにありがたかりけれど、なほ打解くべく、あらざりけりかし、など、いよいよ心づかひせらるるにも、久しくとだえ給はむことは、いと物怖ろしかるべく覺え給へば、言に出でてはいはねど、過ぎぬる方よりは、すこしまつはしざまにもてなし給へるを、宮はいとど限りなうあはれとおぼしたるに、かの人の御移香の、いと深うしみ給へるが、世の常の香の香に入れ、たきしめたるにも似ず、しるき匂ひなるを、その道の人の人にしおはすれば、怪しと咎め出で給ひて、「いかなりし事ぞ」と氣色取り給ふに、殊の外にもて離れぬことにしあれば、いはむ方なくわりなくて、いと苦しとおぼいたるを、さればよ、必ずさる事はありなむ、よもただには思はじと思ひわたることぞかし、と御心さわぎ、けり。さるは單衣の御ぞなども、脱ぎかへ給ひてけれど、怪し

う心よりほかにぞ身にしみにける。匂かばかりにては、残りありてしもあらじ」と、よろづに聞きにくく宣ひつづくるに、心憂くて、身ぞおき所なき、思ひ聞ゆるさま殊なるものを、我こそさきになど、かやうに打背くきはは殊にこそあれ。又御心疑はれる程私が長い御無沙汰をしましたか。思ひのほかに憂かりける御心かな」と、すべて、まねふくもあらず、いとほしげに聞え給へど、ともかくもいらへ給はぬさへいとねたくて、又人に馴れける袖の移香を我身にしめてうらみつるかな。女は、あさましう宣ひつづくるに、いふべき方もなく、「いかがは」とて、
中君 衣の縁で見馴れ身馴を響かす
みなれぬる中の衣と頼みしをかばかりにてやかけ離れなむとて、打泣き給へる氣色の、限りなうあはれなるを見るにも、
宮の心
斯かればぞかし、いとど心やましくして、我もほろく、とこぼれ給ふぞ、色めかしき御心なるや、誠にいみじきあやまちあり

宣ひさしつづ 句宮は怨みもそ
をなだめすかしてゐられる。

御しつらひなども 室内の飾付
などもあれ程輝く迄に高麗や
唐土の錦や綾を張りつめてある
六君方を見たり目で見ても感ぜら
普通ありふれたものに感ぜら
いと静かに 女房の数も少いか
ら、目にうつる感じも静かであ
る。

薄紫色の下著。
瞿麥 表紅梅裏青。
細長 童男や若い婦人の着用す
る細長い衣服。
何事も 萬事に整頓してもの
を盛りの六の君の風姿や何やか
やに比べて見ても、劣つて居る
とも思はれず、懐しく美しく感
ぜられるのは、句宮の愛が並々
でないの、六君に對してひけ
めを取らぬのであらう。

斯かる御移香 句宮は薫の移香
などをばつきり氣付かれなかつ
た折でさへ。

これを兄弟など こんな美しい
中君を、兄弟ならぬ男が、身近
な側で口をきいてゐる中に、何
かの事でもひよつと聲を聞きな
れ姿も見なれたら、何で無關心
でゐられよう、屹度薫と同じや
うな心を引きさうな事だの、心
と、宮は自分の抜目のない浮氣
心からよう分つてゐるから。

しるきさまなる 證據歴然たる
薫の文でもあるかと、手近にあ
る御厨子や小唐櫃といつたやう
なものを、何くはぬ顔して探
して見られるけれども。

たぐいとすくよかに 只ごく真
面目な、文言の簡単な平凡な手
紙などが、別段大切にはしてあ
つたり、何かと一緒にはしてあ
怪し不思議な事だ、どうして
秘密の手紙があるのだらう。ま
だ人の薫の男振も、氣の利
いた女の惚れこんでしまひさ
うなの拒否しよう、中君がむげ
に薫を拒否しよう、互に愛しあ
つてゐる事だらう。

宿 木

なほいと 句宮はそれでもまだ
胸がをさまらなかつたので。

とも、一途には ひとぶるにはえぞ疎み果つまじくうたげに心苦しきさ
まのし給へれば、宮は えも恨み果て給はず、宣ひさしつづ、かつは
こしらへ聞え給ふ。

又の目も、ゆつくりと 心のどかに大殿ごもり起きて、御手水御粥なども
ななにまゐらす。御しつらひなども、さばかり輝くばかり高麗

唐土の錦綾をたちかさねたる目移しには、世の常に打馴れたる
心地して、女房達 人々の姿も、着古して細氣の落ちてるの中にあつたりして なえはみたる打ちまじりなどして、い
と静かに見まはさる。君はなよよかなる薄色どもに、瞿麥の細

長かさねて、中君の打解け姿は 打亂れ給へる御さまの、何事もいとうるはしく、
事々しきまでさかりなる人の御よそひ何くれに思ひくらぶれど、
け劣りても覺えず、なつかしうをかしきは、志のあろかならぬ

に、恥ぢなきなめりかし。まろにうつくしく肥え給へりし人の、
すこしほそやぎたるに、色はいよく白うなりて、あてにをか
しげなり。斯かる御移香などの、いちじるからぬ折だに、中君の 愛敬

づきらうたき所などの、なほ人には多くまさりて思さるるさま
には、これを兄弟などにはあらぬ人の、け近く言ひかよひて、
事に觸れつつ、おのづから聲けはひをも聞き見馴れむは、いか
でかただにも思はむ、必ずしか思ひ寄りぬべき事なるを、とわ

がいと隈なき御心ならひに、おぼし知らるれば、常に心をかけ
て、しるきさまなる文などやあると、近き御厨子、小からびつ
などやうの物をも、さりげなく見給へど、さる物もなし。

たぐいとすくよかに言づくなたてなほくしきなどぞ、わざと
しなけれど、物に取りませなどしてもあるを、怪し、なほいと
斯くのみはあらじかし、と疑はるるに、いとど今日は安からず

思さるる、ことわりなりかし。かの人の氣色も、心あらむ女の、
あはれと思ひぬべきを、などを、などてかは殊の外にはさし放
たむ、いとよきあはひなれば、かたみにぞ思ひかはすらむかし、

と思ひやるぞ、わびしく腹立たしくねたかりける。なほいと安

老人 中君方の老女房。

宮の斯くこもり 句宮が中君方
に。わりなしや どうしたらいいだ
らう、馬鹿らしくてお話にならな
い。うしろやすくと 安心の出来る
やうにといふから世話し出し
た中君をかういふやうな見方を
してよいものか。さはいへど、
さはいへど、この様子ではいく
ら何でも句宮が中君を捨てるお
考へはないやうだ。

よろしき 一寸した衣裳がござ
いませうか。必要がございま
す。例の立たむ月 来月は九月で例
によつて法事が営まれますが、
その料に白い衣裳がございませ
う。正月五月九月は佛事の月。
何か それには及びませぬ。

御匣殿 衣服を調進する所。

ただあるに随ひて あり合せの
衣裳に染めない生地、儘の絹綾
などを取添へて中君方に贈られ
た。

わが御料に 薫の召料として用
意してあつた擣目も平凡ならぬ
紅の具。男の召料故袴や附屬品
はなかつたのだが、どうした間
違か袴がないのにその附屬品の
引腰が一つまじつて居つたの
を。腰は引腰といつて裳につい
た飾紐。

結びける あなたと私とは特別
な因縁のある仲だから(妻にし
ようと思へば出来たのを句宮に
譲つた事) 只一途に恨む事は致
しませぬ。御覽せさせねど、別段中君にお
目にはかけないが、従前も薫の
かうにした御心入れは常の事で馴
れこになつてあるの、今更改ま
しつて返したりする筈のものでお
ないが、大輔は、これを
どう始末しようなどと思案もせ
ず、女房達に分配したりなどし
たので、若き人々の、若き女房で中君の
お側に仕へてゐるのなどは特別
だ。着飾らせておくのがよいの

からざりければ、句宮は二條院に其日もあられる その日もえ出で給はず。六君の方 六條の院には、御文
をぞ二度三度奉れ給ふを、いつの間にあんなに書く種が出来たのたらう 「いつの程に積る御言の葉ならむ」と、
つぶやく老人どももあり。

中納言の君は、(斯く宮の) 宮の斯くこもりおはするを聞くにしも、氣持がわるい 心やま
しく覺ゆれど、以下薫の自名 わりなしや、(これは) わが心のをこがましう悪し
きぞかし、うしろやすくと思ひそめてしあたりの事を、斯くは
思ふべしや、と強ひてぞ思ひ返して、さはいへど、え思し捨て
ざめりかし、と嬉しくもあり、中君の女房達 人々のけはひなどの、衣裳などが儲きは なつかし
き程になえばみためりしを、(と) 思ひやり給ひて、母宮の御方に參
り給ひて、薫よろしきまうけの物どもやさぶらふ。使ふべき事
なむ。(な) と申し給へば、女三宮 例の立たむ月の法事の料に、白き物
どもなどやあらむ。染めたるなどは、今はわざともしおかぬを、特に用意もしてないが
急ぎてこそせさせぬ」と宣へば、薫何か。事々しき用にも侍ら
ず。あり合せの物で結構です さぶらはむに従ひて」とて、女三宮 御匣殿などに問はせ給ひて、

女の装束どもあまたくだりに、幾かさねも 清げなる細長どもも、ただある
に随ひて、ただなる絹綾など取り具し給ふ。中君の着料 みづからの御料と
思しきには、わが御料にありける紅の擣目なべてならぬに、白
き綾どもなど。あまたかさね賜へるに、袴の具、(は) なかりけるに、
いかにしたるにかありけむ、腰の一つありけるを、引き結び加
へて、

結びける契り殊なる下紐をただ一筋に恨みやはする
中君の女房 大輔の君とて大人々々しき人の睦まじげなる人に遣はず。薫 取
りあへぬさまの見苦しきを、つきつきしうもて隠してなむ。(な)
と宣ひて、中君の召料 御料のは、忍びやかなれど、箱にて、箱に入れて 包みも殊なり。
御覽せさせねど、さきくもかやうなる御心しらは常のこ
とにて、目馴れにたれば、氣色ばみかへしなど、ひこしろふべ
きにもあらねば、女房達は いかがなども思ひ煩はで、人々に取り散らし
などしたれば、おのく さし縫ひなどす。若き人々のお前近う

忍びあまりたる 堪へきれぬ心
持をほめかした手紙をあげら
れるので。

偏へに知らぬ 以下中君の心。

昔より 昔から薫に特別な關係
で寄りかかるやうになつて居り
ながら、今更仲違をするのも却
つて人の手前よくならう。

さすがに 何といつても。

さぶらふ人々も 侍女といつて
も、多少相談相手になりさうな
若女房は皆薫の世話で来た新參
者のやうな氣がして。中君が使ひ馴
見給ひ馴れたる女房としては宇治
から連れて来た老女房達であ
る。

おはせましかば 大君が御存命
ならば薫も私にかうした氣持を
持たれるものかと。

宮のつらく 匂宮が冷淡になら
れるだらうと思ふ悲しさより
も、薫の懸想の方が餘計に苦し
く感ぜられる。

やがて端に 薫の爲に早速簀子
に座蒲團をお敷かせなされて。

惱ませ給ふ 御氣分のわるい折
は、御存知のない祈禱僧など
も、お側に近く参り寄るので
の、私も参者などと同様に御簾
の内に入つても差支ありません

いと物しげなる 薫が大變不愉
快らしくしてゐられるので。一
夜物の氣色は、先夜の様子を目
撃した女房達は、夜の通り、薫
げにや、女房の仰しやる通、誠
にこん端近にお置き申すのは誠
に見苦しう存じます。

とほしの人ならばしやとぞ。

斯くてなほいかでうしろやすく大人しき人にてやみなむと思ふ
ぜいとも中君の爲に安心な年寄り役で終始したいものと薫は思ふけれどもさうも行かず

にも随はず、中君の事が氣にかゝつて心にかかりて苦しければ、御文などを、以前よりもありしよ

りはこまやかにて、ともすれば忍びあまりたる氣色見せつつ聞

え給ふを、女君、いとわびしきこと添ひにたる身と思し歎かる。我身と

偏へに知らぬ人ならば、あな物ぐるほしと、きめつけて突放してしまふもわけないはしたなめさし放

たむにも安かるべきを、昔よりさま殊なる頼もし人にならひ來

て、今更に中あしうならむも、なか／＼人目あ・しかるべし、

さすがに淺はかにもあらぬ御心ばへ有様の、あはれを知らぬに

はあらず、さりとて、投合してゐるやうな態度で應對するのも斟酌されるので心かはしがほにあへしらはむも、いとつ

つましく、どうしたものかといかかはすべからむと、よろづに思ひ亂れ給ふに、

さぶらふ人々も、すこし物のいふかひありぬべく若やかなるは、

皆あたらしき心地して、見給ひ馴れたる人としては、かの山里の

古女ばらなり。思ふ事をも、中君と一つ心になつて同じ心になつかしう言ひあはずべ

き人のなきさまには、大君故姫君を思ひいで聞え給はぬ折なし。お

はせましかば、この人も斯かる心も添へ給はましやと、いと悲

しう、宮のつらくなり給はむ歎きよりも、この事・いと苦し

う覺ゆ。例の通り匂宮御不在で静かな晩に

男君も強ひて思ひわびて、中君方へ例のしめやかなる夕つかたおはした

り。やがて端に御茵さしいださせ給ひて、中君いと惱ましき程に

てなむ、お話が出来ませぬえ聞えさせぬ」と、侍女を以て人して聞えいだし給へるを聞くに、

いみじうつらくて、涙の落ちぬべきを、人目を憚るので人目につつめば、強ひ

てまぎらはして、薫惱ませ給ふ折は、知らぬ僧なども近く参り

寄るを、薬師薬師などのつらにても、御簾の内にはさぶらふまじう

やは。斯く人づつてなる御消息なむ、御見舞がひのないやうに思はれるかひなき心地する」と聞え

給ひて、いと物しげなる御氣色なるを、ひとよ一夜物の氣色見し人々、

「げにや、いと見苦しうはべるめり」とて、母屋の御簾うちあろ

して、夜居の僧の座に入れ奉るを、中君女君、は誠に心地もいと苦

うたて掲焉ならむも いやに際
立つて反對するのどうかと
君は人前を思はれるので

ゆゆしう 死なればせぬかと思
はれて。
ためらひつつぞ とぎれがちに
話される。

こよなく 中君があまり奥に引
込んで警戒してゐられるのも
はつらくて。

胸はおさへたる 薫は少將を中
君に近づけたくないから斯くい
ふのである。
げにぞ下安からぬ 「いと苦し
う待るものを」といつた語を受
けて、いかにその通りに薫の
胸はおさへたるかでない(苦し
かた)といふ意。

長かるまじき 胸痛は短命な人
の病む病氣だとか人もいつてゐ
るやうです。
誰も千年の六帖四「憂くも世
の心に物のかはぬか誰も千
年の松ならなくは千の松なら
なく、人生ははかなきものとい
ふ意味に用ひたものといふ
傍聞き 人前では恥かしくて
おかれやうな事だけは言はず
かか御耳 中君一人だけには
味を分らせなから人も人は別
聞き苦しきも感じない風に
よく話されるのを。

世の中を 俗世間の事を断念し
て生涯を終らうといふ心構へを
のみ續けて来たので縁といふ
さるべきにや。これが縁といふ
うときものから疎遠ながらも
大君を熱心に思ひそめたのが
とで、出家入道の素志は、さ
かに挫けてしまつたので、せ
りし、ならひ侍りしを、受け
ける。慰めばかりに大君に對する悲
しさを慰めたいばかりに、あ
ちの女に關係して、それら
々に逢つて居れば、氣の紛れる事
もあらうかなと思ひついで見
る折もあります。

しけれど、人のかう言ふに、うたて掲焉ならむも、又いかかと
つつましければ、物憂ながら、すこしゐざり出でて、たいめ
し給へり。いとほのかに時々物・宣ふ御げはひの、昔の人の
悩みそめ給へりし頃まづ思ひ出でらるるも、ゆゆしう悲しうて、
かきくらす心地し給へば、とみに物も言はれず、ためらひつつ
ぞ聞え給ふ。こよなく奥まり給へるもいとつらくて、簾の下
より几帳をすこし押し入れて、例の狎れくしげに近づき寄り
給ふがいと苦しければ、わりなしと思して、少將の君といふ人
を近う召寄せて、中君「胸なむ痛き。暫しおさへて」と宣ふを聞き
給ひて、薫「胸はおさへたる、いと苦しう待るものを」と、打
歎きて居なほり給ふ程も、げにぞ下安からぬ。薫いかなれば斯
くしも常に悩ましうはおぼさるらむ。人に問ひ侍りしかば、「暫
しこそ心地も悪しかなれ。さて又よろしき折あり」などこそ教
へ侍りしか。あなたは辛抱がなくてさわざなきさるやうに思ふ

ふに、いと恥かしうて、中君「胸はいつともなく斯くこそは侍れ。
昔の人もさこそは物し給ひしか。長かるまじき人のするわざと
か人もいひ侍るめ」とぞ宣ふ。げに誰も千年の松ならぬよを、
・と思ふには、いと心苦しうあはれなれば、この召寄せたる人
の聞き居る手前も憚られず
昔より思ひ聞ゆるさまなどを、かの御耳一つには心得させなが
ら、人は又かたはにも聞くまじきさまに、よくめやすくぞ
言ひなし給ふを、げにありかたき御心ばへにもと聞きわたりけ
り。何事につけても、故君の御事をぞ盡きせず思ひ給へる。い
はけなかりし程より、世の中を思ひ離れてやみぬべき心づかひ
をのみならひ侍りしを、さるべきにや侍りけむ、うときものか
ら、おろかならず思ひそめ奉りし一節に、かの本意の聖心
は、さすがにたがひやしにけむ。慰めばかりに、此處にも彼處
にもゆきかかづらひて、人の有様を見むにつけて紛るることも

へんぐゑ 變化。

いとほしう 中君の心に薰が氣
の毒でもあり又うるさくも思は
れて。人形のついでに 人形の話から
私に妙に、思ひ出してはならな
ざいます。浮舟の事である。

いかさまにして 何とかして
のからした心を思ひきらせてお
だやかな交際をしてゐたいもの
だと思ふと、騒ぎ立てして、少
もつまらないので、何げない様
子を装つてゐられた。何げない様
年頃は、今は生きてゐるとも
知らなかつた人が。

うとくは 大君中君の異母妹で
あるから。

形見など 私を大君の形見だ
どもその点については、いすれ
なかに、何事も却つてすべ
の點で、姉君とは大違ひだと侍女
達も皆申して居りますのに。

いとさしも 似る筈のない浮舟
がどうしてあんなに似て居つた
のでせうか。

その故も その譯と申しまして
たのか、私は存じませぬ。
物は、かなき、父宮は我が死後
に、私共姉妹がものほかない有
様で、生き残り、身の落着も得ら
れないで、流浪するだらうと、そ
事ばかりを心配さうに思召した
の。只一人かき集めて、大君が亡
なつたので、何もかも自分一人
かゝつて来て、父宮が御心配に
なつてゐた意味が、能く分つて
ました。(自分の耻かしく、生活が
父宮の名譽をそこなふ事になる
といふ事)さういふわけで、自分
一人さへ扱ひかねてゐるのに、荷
つまらぬ事(浮舟の出現)まで、荷
厄介になつて来て。

けるを、さやうならむへんぐゑの人もがな」など、とざまかう
ざまに忘れむ方なき由を歎き給ふ氣色の、いと心深げなるも、
いとほしう煩はしうて、今すこし・すべり寄りて、中君「人形の
ついでに、いと怪しく思ひ寄るまじき事をこそ思ひいで侍れ」
と宣ふけはひの、すこしなつかしきもいと嬉しくあはれにて、
中君「何事にか」といふまに、几帳の下より手をとらふれば、い
はとうるさく思ひならるれど、いかさまにして斯かる心をやめて、
なだらかにあらむと思へば、この近き人の思はむことのあいな
くて、さりげなくもてなし給へり。中君「年頃は世に・あらむとも
知らざりし・人の、この夏頃、遠き所より物して、尋ねいでた
りしを、うとくは思ふまじけれど、又うちつけにさしも何かは
睦び思はむと思ひ侍りしを、さいつ頃來たりしこそ、怪しきま
で昔の人の御けはひに通ひたりしかば、あはれに覺えなり侍り
しか。形見・など斯うおもほし宣ふめるは、なかく、何事もあ

さましうもて離れたりとなむみな人々もいひ侍りしを、いとさ
しもあるまじき人の、いかでかはさはありけむ」と宣ふを、夢
語りかともで聞く。中君「あなたに頼らねばならぬ譯があればこそ、そんなに親しんで來られるのでせう
聞えらるらめ。なか今まで斯くもかすめさせ給はざらむ」と
宣へば、中君「いざや。その故も、いかなりけむ事とも思ひわかれ
侍らず。物はかなき有様どもにて、世に落ちとまりさすらへむ
とすらむ・とのみ、うしろめたげに思したりし事どもを、只一
人かき集めて思ひ知られ侍るに、又あいなき事をさへ打添へて、
人も聞き傳へむこそ、いといとほしかるべけれ」と宣ふ氣色を
見るに、宮の忍びて物など宣ひけむ人の、忍ぶ草摘みあきたり
けるなるべし、と見知りぬ。似たりと宣ふゆかりに耳とまりて、
中君「かばかりにて、同じうは言ひ果てさせ給ひてよ」と、いふ
かしがり給へど、さすがに傍痛くて、えこまかにも聞え給はず。
中君「尋ねむと思す心あらば、そのわたりとは聞えつべけれど、委

御心劣りも常陸介の娘など
 世を海中にも大君が亡くなつて
 魂のありかを探す爲には遠い
 海津抄の蓬萊までも根限りいさ
 立つて参らうと思ひますもの
 孟津抄の玄宗の楊貴妃のため
 中興の憂(う)の義にいひかけ
 枕詞の憂(う)の義にいひかけ
 いとさまで浮舟の事はそれ
 程まで思ふべきではありません
 人形の願ひ大君の像を造つて
 宇治の寺の本尊にしたいと申し
 ましたが、浮舟はその木像位に
 考へてゐるといふ法はありま
 すまい。
 古への御ゆるしも父宮が御子
 とも思召さなかつた浮舟の事
 をへんぐゑのたくみ大君の像を
 造る爲に變化の工匠がほしいと
 仰しやるのがお氣の毒さにか
 うまで浮舟の事をお話し申上げ
 たのです。
 母なる人 浮舟の母、中將の君。
 はしたなくも無愛相な挨拶も
 出来ずに居りました所。
 これをいかさまにこの娘をど
 う處置したものでしたか。母が歎
 うてゐるやうでしたが、母が歎
 佛にならむは、大君の像の代り
 となして宇治の本尊に据ゑられ
 ぬ。さうばは此上ない仕合でせうが、

しうはしもえ知らずや。又あまり言はば、御心劣りもしぬべき
 事になむ」と宣へば、世を海中にも、魂のありか尋ねには、
 心の限り進みぬべきを、いとさまで思ふべきにはあらざ
 なれど、いと斯く慰めむ方なきよりはと思ひ寄り侍る。人形の
 願ひばかりには、なほたしかに宣はせよ」と、うちつけに責め聞え給ふ。中書いざ
 や、古への御ゆるしもなかりし事を、かうまでも漏らし聞ゆる
 も、かつはいと口がるけれど、へんぐゑのたくみ求め給ふいと
 ほしさにこそ斯くも」とて、中書いと遠き所に年頃經にけるを、
 母なる人のいとうれはしき事に思ひて、あながちに尋ね寄りし
 を、はしたなくもえいらへで侍りしに、物したりしなり。ほの
 見えし。これをいかさまにもてなさむと歎くめりしに、佛にな
 らむは、いとよなき事にこそはあらめ、さまではいかでかは

さりげなくて以下薫の心。
 かううさき心を自分のうる
 さい懸想をどうかして無くする
 のだ。な。あればと思つておられる
 哀れなり。浮舟の心が引かれ
 あるまじき事とは以下又薫の
 心中。中書は以ての外のことま
 深く思ひながら、露骨にきま
 りわくる思はせるやうな仕打も
 えうなさらぬのは。中書は。
 内には、薫に油断させて
 おいて、その隙に奥に引込まれた
 思ひしづめむ。我慢のしやうも
 ないやうな氣がして。

ひたぶるに淺はかならむと言
 つても無闇に輕はづみな眞似をす
 るのにも矢張中書にとつては勿論
 自分にとつてもいやなおもし
 るからぬ事故辛抱してやなほ
 斯くのみ思ひてはどうか煩悶ば
 かりしてゐてはどうしたらよい
 のか。いかにしてか「すべからむ」
 を修飾する。どんな風にして、
 世間の非難を受けずに而もわが
 目的の達するやうな方法を講じ
 たりた。おれたち練じたる戀愛道にか
 けては、薫はそれないせいか。

など聞え給ふ。さりげなくて、かううるさき心をいかで放
 つわざもがなと思ひ給へる、と見るはつらけれど、さすがに哀
 れなり。あるまじき事とは深く思ひ給へるものから、顯證には
 對して、したなきさまにはえもてなし給はぬも、見知り給へるにこそは
 ゐられないのだと思ふと、なげな氣持の中に、夜もいたう更けゆくを、内には人目いと
 傍痛く覺え給ひて、うちたゆめて入り給ひぬれば、男君、こと
 わりとは返す、思へど、猶いと恨めしう口惜しきに、思ひし
 づめむ方もなき心地して、涙のこぼるるも人わろければ、よろ
 づに思ひ亂るれど、ひたぶるに淺はかならむもてなし、はた、
 なほいとうたてわが爲もあいなかるべければ、念じかへして、
 常よりも歎きがちにて出で給ひぬ。斯くのみ思ひては、いかが
 すべからむ、苦しうもあべいかな、いかにしてかは、大方の
 世のもどきあるまじきさまにて、さすがに思ふ心のかなふわざ
 をばすべからむ、など、ありたち練じたる心ならねばにや、

似たりと 大君に似て居ると中
君がいはれた浮舟をも、どうし
たらその眞偽が見定められよ
う。さばかりのきは 大した身分の
女でもないから。中君が勧められ
たからといつても自分が腹から
其の氣にならぬなら。湖月抄本は誤
り。浮舟に對してはあせる氣も
起らない。いとど昔遠くなる 大君との縁
が。少しは疎遠になるやうに思は
れて。いとどしく「人影も殊に見え
ず」を修飾する。訪ふ人として
風のみ吹き拂ひて 訪ふ人として
見るにまづ 薫は舊邸を見るな
りまづ 涙に目もくれて。青
銅の几帳 辨は今も喪に服し
て居る事故几帳の帷子も青銅に
障子口に持ち出してその蔭に坐
つた。いとど長く 几帳越の對面は
誠に恐縮でございますが。

わがため人のためも心やすかるまじき事を、わりなくおぼし
明かす。似たりと宣ひつる人をも、いかでかは誠かとは見る
べき、さばかりのきはなれば、思ひ寄りむに難うはあらずと
も、人の本意にもあらずば、うるさくこそあるべけれなど、な
ほそなたぢまには心も立たず。
薰が宇治の舊邸を
宇治の宮を久しう見給はぬ時は、いとど昔遠くなる心地して、
すすろに心細ければ、長月廿よ日の程におはしたり。いとどし
く、風のみ吹き拂ひて、心すごう荒ましげなる水の音のみ宿守
にて、人影も殊に見えず。見るにまづかきくらし、悲しき事
ぞ限りなき。辨の尼召出でたれば、障子口に青銅の几帳さし出
でて參れり。いとど長く、ましていと怖ろしげに侍れば、
つつましくなむ」と、まほには出でこず。薰いかにながめ給
れる事だらうと
ふらむと思ひやるに、同じ心なる人もなき。物語も聞えむとて
なむ。はかなくも積る年月かな」とて、涙を一目浮けておはす

人のうへにて 大君が中君の事
でつまたぬ心配をしてあられた
頃の空だと思ひ出しますにつけ
ても。

げにかの歎かせ 大君が心配し
ておいでになつた通り句宮と中
君との間が面白からぬ此頃の御
様子をはのかに承るにつけて
さま／＼になむ 大君にもお氣
の毒中君にもお氣の毒で。お氣
とある事も何事も生きてさへ
居ればその間には又立て直つて
よくなる事もあるものを、大君
が深案じをして亡くなられたの
は、私の過失がもとのやうに思
はれて立直る事が出来なかつた
は、それを見事に出来なかつた
此頃の御有様は、此頃句宮が六
君を娶られた事は、なかに、そ
おくれ先立つ程、新古今哀傷遍
昭一末の露本の字や世の中のお
くれ先立つためしなるらむ」

るに、老人は、いとど更にせきもあへず。辨人のうへにて、あ
の御夜がれを歎かれた事
いなく物を思ほすめりし頃の空ぞかしと思ひ給へ出づるに、い
つと侍らぬなかに、秋の風は身にしみてつらう覺え侍りて、
げにかの歎かせ給ふめりしもしるき世の中の御有様を、ほのか
に承るも、さま／＼になむ。と聞ゆれば、薰とある事もかか
る事も、ながらふればなほるやうもあるを、あぢきなく思しし
の間の事を
みけむこそ、わが過ちのやうになほ悲しけれ。此頃の御有様は、
何か、それこそ世の常なれ。されどらしろめたげには見え聞え
給はざめり。言ひても言ひても、むなしき空にのぼりぬる煙の
みこそ、誰ものがれぬ事ながら、おくれ先立つ程は、なほいと
いふかひなかりけれ」とて又も泣き給ひぬ。
阿闍梨召して、例のかの御忌日の經佛のこのことなど宣ふ。薰
「さて此處に斯く時々物するにつけても、かひなきことの安から
ず覺ゆるがいとやくなきを、この寢殿こぼちて、かの山寺のか

あるべからむやうに 適當に取
計らつて下さい。
ほかにては よそならば、薫が
こんなお婆さんを何のかのと世
話される筈もないのだが。

今ほとなり給ひし 御臨終の折
に、お方がお生れになる珍らし
いお方の心待ちに待つて早く
見たいものとお心待ちに待つて
出されませう。以下浮舟の身上
を語るの事。

斯く思ひかけ侍らぬ こんなに
お婆さんになつてから、圖らず
もかうしてお目に懸ります事
は、柏木の御存命中におかけで自
奉公申上げておいたおかげで自
然かゝらなつたのだと。
心憂き命の 長生きはつらいも
うしてございませう、その間に
長生きのつらさをしみ、味は
ひましたといふ事は。
おぼつかなく すつかり引込み
きりになつて無沙汰をして居る
のは、私を深くきらつたからな
のでせう。
ゆゆしき身にて 私縁起でも
ない尼の身故。

盡きもせず 「語りて」に係る。
年頃の御有様 「故姫君の御事
ども」と同格同義。

歌語りなどを「言づく」なる
ものから「語る」ので「」に續く句
法。
つきなからず 老婆は老婆らし
く。「言づく」なるものから「の
下に省かれた」語るの「」を修飾
する。
うちわななきなれど この下に
「語る」などの語が省略されてゐ
る。
いと聞き添へ 薫はもと、
自分でもさう感じて居つたのだ
が、辨の話を聞いて一入その感
を深められた意。
宮の御方は 以下中君に對する
薫の感想。
我には 自分に對してだけは、
せひとも深みのある情味豊かな
女と思はれた。
形代 前に人形とあつたのと同
じで、本物の代りになるもので
浮舟の事。
人づてに これは又聞きなので
ございませう。以下浮舟の身上
を語るの事。
上臈 上臈女房。
心ばせなども 氣立なども 萬更
ではなかつた上臈女房を。

ば、御庄の人召して、あるべからむやうに物し給へ」など、ま
上の事を辨に
めやかなる事どもを語らひ給ふ。ほかにては、斯ばかり・さだ
過ぎたらむ人を、何かと見入れ給ふべきにもあらねど、夜も近
く臥せて、昔物語などせさせ給ふ。故權大納言の君の御有様も、
聞く人なきに心やすくて、いとこまやかに聞ゆ。今ほとなり
給ひし程に、珍らしくおはしますらむ御有様を、いぶかしきも
のに思ひ聞えさせ給ふめりし御氣色などの、思ひ給へ出でらる
るに、斯く思ひかけ侍らぬ世の末に、斯くて見奉り侍るなむ、
かの御世に睦まじう仕うまつりおきししるしの、おのづから侍
りけると、嬉しくも悲しくも思ひ給へ知られ侍る。心憂き命の
程にて、斯くさまの事を見給へ過ぐし、思ひ給へ知り侍る
なむ、いと恥かしう心憂くなむ侍る。宮よりも、『時々は參りて
見奉れ。おぼつかなく絶えこもり果てぬるは、こよなう思ひ隔
てけるなめり』など、宣はする折々侍れど、ゆゆしき身にてな

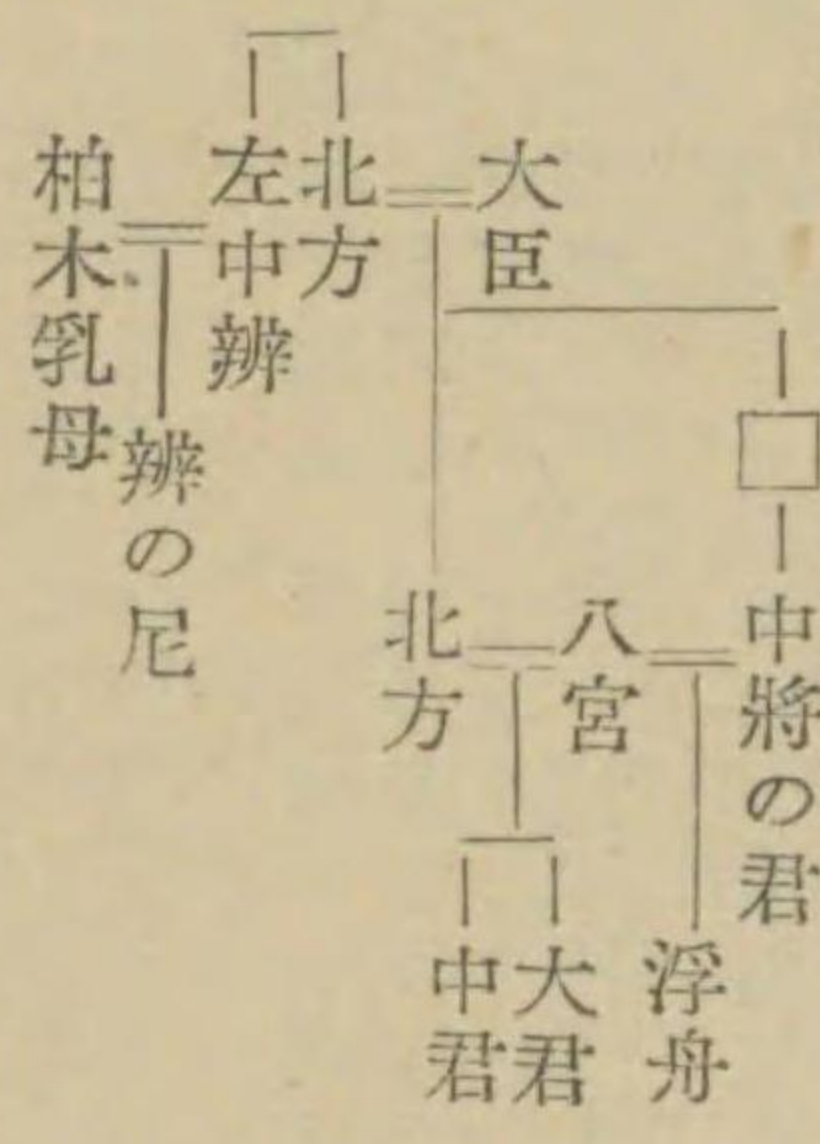
む、阿彌陀佛よりほかに、見奉らまほしき人もなくなりにて
侍る」など聞ゆ。故姫君の御事ども、はた盡きもせず年頃の御
有様など語りて、何の折何と宣ひし、花紅葉の色を見ても、は
かなく詠み給ひける歌語りなどを、つきなからず、うちわなな
きたれど。こめかしう言づくなるものから、をかしかりける、
人の御心ばへかなとのみ、いと聞き添へ給ふ。宮の御方は、
今すこし今めかしきものから、心ゆるさざらむ人の爲には、は
したなくもてなし給ひつべくこそ物し給ふめるを、我には、い
と心深くなさけしとは見えて、いかで過ぐしてむとこそ思
ひ給へれ、など心のうちに思ひくらへ給ふ。さて物のついでに、
かの形代のことをいひ出で給へり。京に此頃侍らむとはえ知
り侍らず。人づてに承りし事の筋ななり、故宮のまだ斯かる山
・住みもし給はず、故北の方・亡せ給へりける程近かりける頃、
中將の君とてさぶらひける上臈の、心ばせなどもけしうは侍ら

いと忍びて「物宣はせけるを」に係る。ごく秘密にほんの聊かばかりお手をかけた事を誰が知る人はございませんでした。女子、これが浮舟である。浮舟は中君より五つの妹。遁世の御志は中君より五つ。あいなく煩はしう。遊世の御志があるのには餘計な係累が出来て、煩はしくも不愉快にも思召すやうにおなり遊ばして。やがて大方、その儘殆ど清僧生活に入つておしまひになつた。さういふわけで、中將はあつたてしまつたのでございませんで、その君、浮舟が無事でございませぬ。お聞き申上げたのを。

更に斯かる消息、こんな事は決して知らせて来る筋合のもので常陸になりて、中將の夫が今度行つてしまつたので、任國に下つた。この年頃、この数年、浮舟の事はとんと沙汰なしでございませぬ。いとつくつく、浮舟が愛らしく育つておいでになるにつけては、悲しうございませぬ。さういふ頃、中將の手紙に、まもなく長々と書いてあつたやうでございませぬ。

委しう聞きあきらめ、浮舟の身の上を辨からず知られて、さうば誠にも、浮舟が大君に似てゐると中將は、はれたが、では本當かも知らぬ、見たいものだ。

かすまへ給はざり、八宮はわが子とも思召さなかつたけれど、察する所、近親の方ではある。このわたり、浮舟がこちらに訪ねて来るやうな折がありまして、私、私が斯様々々申して居つたと傳へて下さい。



さしはへては、わざ／＼訪ねては参らぬやうでございませぬ。斯かる仰せごとなど、御傳言の趣を浮舟に。

歸り給はむとて、昨晩薰の來るのよべおくれであつたから持参した。

ざりけるを、いと忍びて、はかなき程に物宣はせけるを、知る人も侍らざりけるに、女子をなむ生みて侍りけるを、さもやあらむと思ふ事、事のあつたとたん、女御子、あいなく煩はしう物しきやうに思しなりて、又とも御覽じ入るる事も侍らざりけり。あいなくその事に思し懲りて、やがて大方聖にならせ給ひにけるを、はしたなく思ひて、えさぶらはずなりにけるが、みちのく、守の妻になりて、くだりけるを、一年のぼりて、その君平らかに物し給ふ由このわたりにも仄めかし申したりけるを、聞召しつて、『更に斯かる消息あるべき事にもあらず』と宣はせ放ちければ、かひなく、なむ歎き侍りける。さて又常陸になりて下り侍りにけるが、この年頃音にも聞え給はざりつるが、この春のぼりて、かの宮には尋ね参りたりけるとなむほの、聞き侍りし。かの君の年は、二十許りになり給ひぬらむかし。『いとつくつく生ひ出で給ふが悲しき事』などこそ中頃は文にさへ書き續け

てなむはべめりしか」と聞ゆ。委しう聞きあきらめ給ひて、さらば誠にもあらむかし、見ばや、と思ふ心出でせぬ。昔の御けはひに、かけても觸れたらむ人は、知らぬ國までも尋ね知らまほしき心地のあるを、かすまへ給はざりけれど、思ふにけ近き人にこそはあなれ。わざとはなくとも、このわたり音なふ折あらむついでに、斯くなむいひしと傳へ給へ」などばかり宣ひおく。母君は、故北の方の御姪なり。辨も離れぬ中らひに侍るべきを、そのかみはほかに侍りて、委しうも見給へ馴れざりき。さいつ頃、京より大輔がもとより申したりしは、『かの君なむ、いかでかの御墓にだにまゐらむと宣ふなる。さる心せよ』など侍りしかど、まだ此處に、さしはへては音なはずはべるめり。今、さらばさやのついでに、斯かる仰せごとなど傳へ侍らむ」と聞ゆ。歸り給はむとて、よべおくれでもて参れる絹綿な

尼君の下衆 辨の召使。

召してたぶ 法師ばらや尼君の下衆どもを薫が召寄せて布などをお與へになる。薫からかう斯かる御とぶらひ 薫からかう身分に合せては、見すばらしくもなくしんみりと佛道生活をしく居つた。

踏みわけたる 古今秋下「秋は來ぬ紅葉は宿に散り敷きぬ道踏みわけ訪ふ人はなし」

老木 樹木や岩石等に密着匍匐する蔓草。湖月抄(師) 蔦は宿生とあり。こだに 木烟。蔦の一種でここにいふ宿木の事である。枕草子「草は」の條にもその名が見える。

やどりきと 昔此處に泊つた事があるといふ事を思ひ出さなかつたら、今日此處に泊つてもどんなに淋しい事だらう。

荒れ果つる 此の荒れ果つた朽尼の宿を、昔の旅寝の宿と覺えて居つて下さるにつけても悲しうございませす、大君がいらつしやらなく。

紅葉 萬の紅葉で、さつきこの南の宮 薫の居る三條の宮。句宮の二條院の南にあるからいふ。例のむつかしき 又いつものやうにうるさい事が書いてあつたのである。蔦に文を添へてある。

日頃何事か 昨今は御機嫌よろしうございませすか。いとど峯の朝霧に 京に居つてさへ晴れん、しい氣がしないのひをして参りました。古今雜下「雁のくる峯の朝霧晴れずのみ思ひ盡させぬ世の中」

御ゆるし侍りて 御承諾あつての上で建物を移轉する事も決行致しませう。 まろありとぞ 私に在郎だと聞いてこんな真面目な事ばかり書いてあるのだらう。女君は事なき嬉し中君は何も書けるのに、宮が強く思つてあら地をわいてはれるのをひどいとよろづの罪も 縦ひ中君に過失があつたにしろ、程美しい。かしこは「あらし果つまじう思ひ侍るを」に續く。

どやうの物、阿闍梨に贈らせ給ふ。尼君にも賜ふ。法師ばら尼君の下衆どもの料にとて、布などいふものをさへ、召してたぶ。心細きすまひなれど、斯かる御とぶらひたゆまざりければ、身の程には、いとめやすく、しめやかにてなむ行ひける。木枯の、堪へがたきまで吹きとほしたるに、残る梢もなく散り敷きたる紅葉を、踏みわけける跡も見えぬを見渡して、とみにもえ出で給はず。いと氣色あるみやま木に宿りたる蔦の色ぞまだ残りたる。こだになどすこし引き取らせ給ひて、宮へとおぼしくて持たせ給ふ。

やどりきと思ひ出でずば木の下の旅寝もいかに淋しからましと獨りごち給ふを聞きて、尼君、荒れ果つる朽木のもとをやどりきと思ひおきける程の悲しさ飽くまで古めきたれど、故なくはあらぬをぞ、聊かの慰めには思されける。

中君に薫が 宮に紅葉奉れ給へれば、男宮おはします。程なりけり。「南の宮より」とて、何心もなくもて参りたるを、女君、例のむつかしき事もこそ、と苦しく思せど、取り隠さむやは。宮、「をかしき蔦かな」と、ただならず宣ひて、召寄せて見給ふ。御文には、薰「日頃何事かおはしますらむ。山里に侍りて、いとど峯の朝霧に感ひ侍りつる。御物語もみづからなむ。かしこの寢殿、堂になすべき事、阿闍梨に物しつけ侍りにき。御ゆるし侍りてこそは、ほかに移す事も物し侍らめ。辨の尼君に、さるべき仰せごとは、遣はせ」などぞある。よくもつれなく書き給へる文かな。まろありとぞ聞きつらむ」と宣ふも、すこしはげにさやありつらむ。女君は、事なきを嬉しと思ひ給ふに、あながちに斯く宣ふをわりなしと思して、うち怨じて居給へる御さま、よろづの罪も、許しつべくをかし。かへりごと書き給へ。見じや」とて、ほかさまにそむき給へり。あまえて書かざらむも怪

つて習ひ得た手法までが何のさ
うまで劣る事がございませう。
獨束なきまだ十分に覚えこん
でない弾法などを聞きたがつて
おられるので。

昔こそ昔は教はる方(八宮)も
いらつしやいました。が、碌々
えこみせず仕舞ひましたも
のを。

かばかりの事も、こんな些細な
事でも、私をきらつてなさらな
いのがつらい。此頃結婚した人
(六君)は、まだ十分馴染む程で
もありませんが、未熟な初心の
稽古事をも隠さずにして見せま
す。

かの君にはた、私には隠しもな
さるとも、あの方にはかうも
隠したるまい。並々ならぬ間
柄のやうです。から。

伊勢の海、催馬樂伊勢海「伊勢
の海、伊勢の海、清き渚の
しほがひになのりそや、摘まむ、
貝や拾はむ、玉や拾はむ」

斯かる御有様に、宇治に住んで
いらつしやつた當時は、こんな
結構な生活が出来ようとは、夢に
も思はれなかつたのに、その宇
治に又歸りたさうに思召してそ
んなに仰しやるのは誠にさげ
さない。

三四日もあり、句宮が三四日間
二條の自邸に引籠つて、あられ
て、御物忌といふ口實で六君方
へ無沙汰してゐられるので、
おとどちより夕霧が禁中を
退出の途次二條院に立寄られた
ので、
事々しげなる、直衣指貫の参内
の儘であるから斯くいふ。
あなたに、寝殿の自室にお歸り
になつて夕霧に對面される。

あはれにこそ、久々の來訪故無
量の感に打たれたのである。

御いきほひ、中君の侍女達が夕
霧の威勢の盛なるさまを見るに
つけて、
ならぶべくも、中君と六君とは
比べものにならない、それがす
つかり氣をくさらせてしまつた

どをゆかしげに思いたれば、中君が句さらば、獨奏は物足りないから合奏しなさい獨りごととはさうぐし
きに、相手をなさいさしいらへし給へかし」とて、人召して、箏の御こと取
寄せさせて弾かせ奉り給へど、中君に昔こそまねぶ人・物し給ひし
かど、はかくしう聞きもとめずなりにしものを」とて、さまりわつつ
ましげにて手も觸れ給はねば、句かばかりの事も、隔て給へる
こそ心憂けれ。此頃見るあたりは、まだいと心解くべき程にも
あらねど、片なりなる初事をも隠さずこそあれ。すべて女は、
柔和で素直なのが柔かに心うつくしきなむよき事とこそその中納言も定むめりし
か。かの君にはたかうもつつみ給はじ、こよなき御中なめれば」
など、まめやかに怨みられてぞ、中君は打敷きてすこししらべ給ふ。
緒がゆるびたりければ、盤渉調に合せ給ふ。搔合せなど、爪音をつま音をか
しう・聞ゆ。「伊勢の海」謠ひ給ふ御聲のあてにをかしきを、女
ばら・物(も)のうしろに近づき参りて、上機嫌であるゑみひろごりて居たり。
女房「一心おはしますはつらけれど、それもことわりなれば、なほ
句宮に句宮も愛していらつしやるのはつらいが
無理もない事だから

中君は仕合人と申すべきだらうわがお前をば、さいはひ人とこそ・申さめ。斯かる御有様にま
じらひ給ふべくもあらざりしとしごろの御すまひを、又歸りな
まほしげに思して宣はするこそいと心憂けれ」など、御前なくいふただいひ
にいへば、若き人々は、「あなかまや」・と制す。御ことども教
が中君にへ奉りなどしつづ、三四日もありおはして、御物忌などことつ
け給ふを、六君方ではかの殿には怨めしく思して、おとどちより出で給
ひけるままに此處に参り給へれば、句宮「事々しげなるさまして、
何しにいましつるぞとよ」とむづかり給へど、あなたに渡り給
ひて、(ん)たいめ・し給ふ。格別の用事なき折は殊なることなき程は、二條院この院を見て
久しうなり侍るもあはれにこそ」など、昔の御物語などすこし
聞え給ひて、夕霧が句宮をやがて引きつれ聞え給ひて出で給ひぬ。御子ども
の殿ばら、その他のさらぬ上達部殿上人なども、いと多く引き續き給へ
る御いきほひこちたきを見るに、(す)ならぶべくもあらぬぞくし
いたかりける。女房達が人々のぞきて見奉りて、女房さも清らにおはしけ

直物 除目の後に追加して行ふ
任官式。江次第抄「直物者、除
目之時被_レ給_二三省之召名中一
有_二失錯之時_一、大臣著_レ陣、合_二
參議_一改_二直件召名_一也、上古每
年除目訖、一月中行_レ之、中古以
來每年不_二必行_一之、其時召出年
々召名而悉改_レ之、其失錯者、
外記作_二直物勘文_一奏上也」

僧など 此處には生憎祈禱僧な
どが詰めてゐて大變不都合な所
で恐縮します。

答の拜 返答の拜禮。花鳥「拜
賀などに來る人には主人南階に
おりくだりて答拜揖讓の作法あ
る也」
つかさの人に 大將に就任の時
は部下の中少將將監等を召して
披露宴を催すのが常で、其折に
は相伴役として親王や公卿を請
待する。それを垣下の衆とい
ふ。薫は右大將故右近衛府の人
々を招くのである。
垣下 相伴役。

いと飽かず 折角六條院に來て
居りながら句宮が六君にあひも
せずに歸られたから。

劣るべうも 中君も八宮の姫君
で六君に劣る筈もない御身分な
のだが、六君は自分の方が現在
聲望の花々しいのに増長して専
横な振舞ひしてゐられるのであ
らう。
よべおはしまし 昨夜の慶宴に
句宮がおいで下されたお禮言上
の中、若君御誕生の御祝をもつ
け加へて、薫がつい一寸句宮
立ちながら、薫がつい一寸句宮
方刻退出されたのである。産儀を憚つて
産養 花鳥「李部王記天曆四年
七月七日是夕藤女御有_二産養事_一、
産婦饗重十六合破子食七荷屯
食八具基手錢二萬贈物兒衣襦各
五重納_二支佐木宮_一合_二有_二白絹
裏_一使_二大藏水藤原守忠_一」出產
後三夜五夜七夜九夜に産家に食
催す事。
屯食 強飯を握り固めて鶏卵狀
に丸く少し長く盛つたもの。
碁手の錢 碁の勝負に賭ける
錢。
椀飯 飯器に盛つた飯。
衝重 檜の白木で方形に造つた
折敷に臺を重ねたもの。
わざと目馴れぬ 薫が特別珍ら
しい趣向を凝らした跡が見えて
居つた。
浅香 沈香の類で水に浮ばず沈
まない物。
折敷 へぎで作つた角盆で、食
器を載せる。
檜破子 檜の薄板で作つた、内
部に仕切のある辨當箱。

二月の朔日ごろに、直物とかいふことに權大納言になり、
右大將かけ給ひつ。
右の大い殿左にておはしけるが、辭し給へ
るところなりけり。
も參り給へり。いと苦しうし給へば、こなたにはおはします程な
りければ、やがて參り給へり。
なき方に」と驚き給ひて、あざやかなる御直衣、御下襲など奉
り、引きつくるひ、
とり、にいとめでたし。
るじの所に」と、請じ奉り給ふを、惱み給ふ人によりてぞ思し
たゆたひ給ふめる。
の院にてなむありける。
あまり騒がしきまでなむ集ひ給ひける。
静心なければ、まだ事果てぬに急ぎ歸り給へるを、
御方には、「いと飽かずめざましう」と宣ふ。劣るべうもあらぬ

もてなし給へるなめりかし。
からうじてその曉に、男にて生れ給へるを、
さまにて、嬉しく思したり。
しくおぼす。よべおはしましたりしかしまりに、やがてこの
御よろこびも打添へて、立ちながら參り給へり。
はしませば、參り給はぬ人なし。
御わたくし事にて、五日の夜、
の錢、椀飯などは、世の常のやうにて、
ちこの御ぞいつへがさねにて、
ず、忍びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、いとわざと
目馴れぬ心ばへにぞ見えける。
坏どもにて、ふんずく參らせ給へり。
ばさるものにて、檜破子三十、
御程なるを、只今の覺えの花やかさに思しおごりて、おしたち
もてなし給へるなめりかし。
からうじてその曉に、男にて生れ給へるを、
さまにて、嬉しく思したり。
しくおぼす。よべおはしましたりしかしまりに、やがてこの
御よろこびも打添へて、立ちながら參り給へり。
はしませば、參り給はぬ人なし。
御産養、三日は例のただ宮の
の錢、椀飯などは、世の常のやうにて、
ちこの御ぞいつへがさねにて、
ず、忍びやかにしなし給へれど、こまかに見れば、いとわざと
目馴れぬ心ばへにぞ見えける。
坏どもにて、ふんずく參らせ給へり。
ばさるものにて、檜破子三十、

ふんずく粉熟。米麥豆胡麻等の粉を餅にし煮て甘藷をかけ、こね合せて細い竹筒の中に入れて固めた菓子。
宮の大夫 中宮職の長官。
宮の句 句が始めてお父様になられたのだからお祝せずにはおかれぬ。
御佩刀 生兒の守り刀。

大殿 夕霧。夕霧は中君を快ようしからず。夕霧は中君を快からず思つてゐられるのだが、宮の思はくもあるのです。

斯くおもたしう 斯様に面目ある事花やかな事が多いので、人々が盛大に祝つてくれた事をいふ。
斯くのみ 以下薫の心。中君が人の親といふ氣持になりきつてしまはれる事だらうから、今迄よりも一層自分との仲には溝が出来たのだから、宮の御愛情も並々であらう筈がない。

藤壺の宮 藤壺の御腹なる女二宮。

天の下響きて 天下をゆすつて立派にかしづかされてゐられた女二宮に平人の薫が配偶者となられるといふ事は、やはり物足らず。
さる御ゆるしは 女二宮を薫にとのお許しはあつたにしても、今々こんなにお急ぎになるにも當らない事だ。
きし方の 婿ときめた以上は前例のない程大急ぎで結婚させてやらう。

斯くさかりの御世に 主上が御老年ならばとにか。

左のおとど 夕霧。薫といふ人は珍らしい程人望のある運のよい人だ。
かの母宮 薫の御母女三宮。
人も許さぬもの 柏木の北の方でその諒解も得ないで、夕霧が柏木の死後強ひて妻とした方と、女三宮の御姉女二宮。夕霧と落葉宮との結婚事情は夕霧巻に詳しい。

人目に事々しくは殊更・しなし給はず。七日の夜は后の宮より、御産養なれば、參り給ふ人々いと多かり。宮の大夫を始めて、殿上人上達部、數知らず參り給へり。うちにも聞召して、今上宮の始めて大人び給ふなるには、いかでかは」と宣はせて、御佩刀奉らせ給へり。九日も、大殿より仕うまつらせ給へり。よるしからず思すあたりなれど、宮の思さむところあれば、御子の君だちなど參り給ひて、すべていと思ふことなげにめでたければ、御みづからも、月頃物思はしく心地の惱ましきにつけても、心細う思しわたりつるに、斯くおもたしう今めかしき事ども、の多かれれば、すこしは慰みもやし給ふらむ。大將殿は、斯くのみ大人び果て給ふれば、いとどわが方ざまはけどほくやならむ、又宮の御志も、えあろかならじ、と思ふは口惜しけれど、又初めよりの心おきてを思ふには、いと嬉しうもあり。
二月二十日あまりの程にぞ、藤壺の宮の御裳着のこ

とありて、又の日なむ大將參り給ひける。その夜のことは、忍びたるさまなり。天の下響きていくしく見えつる御かしづきに、ただ人の具し奉り給ふぞ、なほ飽かず心苦しう見ゆる。さる御ゆるしはありながらも、只今斯くしも急がせ給ふまじき事ぞかし」と、謗らはしげに思ひ宣ふ人もありけれど、思し立ちぬること、すがしうおはします御心にて、きし方のためしなさままで同じくはもてなさむ、と思しおきつるなめり。御門の御婿になる人は、昔も今も多かれど、斯くさかりの御世に、ただ人のやうに婿取り急がせ給へるたぐひは、すくなくやありけむ。左のおとども、夕霧、珍らしいかりける、人の御覺え宿世なり。故院だに、朱雀院の御末にならせ給ひて、今はとやつし給ひしきはにこそ、かの母宮を得奉り給ひしか。我はまいて人も許さぬものを拾ひたりしや」と宣ひつれば、宮はげにと思すに、恥かしうて、御いらへもえし給はず。

三日の夜 薫と女二宮との結婚
大藏卿 女二宮の母藤壺の兄。
かの御前 薫の前驅の人々。

その程の事は 三日夜の作法は
平人の嫁娶の折と同様で、内親
王の御婚儀といつた公式のもの
ではなかつた。

里 薫の三條の宮。

まかてさせ 女二宮を自邸にお
引取り申す事を考へてあられ
た。

いと忝からぬ それではあまり
勿體なう存じます。

御念誦堂 女三宮の。寢殿と御
念誦堂とを新築の廊で接続され
たのである。

斯かる御心づかひ 女二宮を自
邸に引取らうとの薫の御心づも
程なく打解け 結婚後間もない
のに早くも氣を許して、軽々し
く宮中をお出ましになるといふ
事をいかがなものかと主上は不
安に思召す。

心の闇 後撰雜一兼輔の歌によ
つた詞。

ただこの御事を たゞ女二宮の
事ばかりを宜しくお頼みになつ
た。

御用意深かり 懇にお世話遊ば
された。

斯くやんごとなき 斯様に主上
や御母宮からかはるゝ無上に
大事にされてゐるのは名譽な事
と満足すべきであるのに、どう
嬉しくも思はず、相變らずどう
かすると物思ひに沈んで。

宮の餅のいそぎ 中君の腹の若君。
餅の準備を精出して。五十日の祝の
見入れつつ 薫が世話をやい
て。

沈香 以下五十日の祝に使
用する調度類。

三日の夜は 大藏卿より始めて、
かの御方の心寄せになさせ給へ
る人々、家司に仰言賜ひて、忍びやかなれど、かの御前、隨身、
車添ひ、舍人などまで祿賜はず。その程の事、は、わたくし
事のやうにぞありける。斯くてのちは、忍びくりに參り給ふ。

心のうちには、なほ忘れがたき古へさまのみ覺えて、晝は里に
起き臥し眺め暮して、暮るれば心よりほかに急ぎ參り給ふも、
通つて行くのに馴れないので
ならはぬ心地に、いと物憂く苦しうて、まかてさせ奉らむこと
をぞおぼしおきてける。母宮はいと嬉しき事におぼして、

おはします寢殿を譲り聞え給ふべく宣へど、薫いと忝からむ
とて、御念誦堂のあはひに、廊を續けて造らせ給ふ。西面に移
るに引移られるお考へらしい

るはしく新しくあらまほしきを、いよく磨き添へつつ、こま
かにしつらはせ給ふ。斯かる御心づかひをうちにも聞こしめし
て、程なく打解け移ろひ給はむを、いかがと思したり。御門と

聞ゆれど、心の闇は同じことになむおはしましける。母宮の御
もとに、御使ありける御文にも、ただこの御事をのみなむ聞え
させ給へりける。故朱雀院の、取りわきてこの尼宮の御事をば
聞えおかせ給ひしかば、斯く世を背き給へれど、衰へず、何事
ももとのままに、奏せさせ給ふことなどは、必ず聞召し入れ、
御用意深かりけり。斯くやんごとなき御心どもに、かたみに限
りもなくもてかしづき騒がれ給ふおもたしさも、いかなるに
かあらむ、心のうちには殊に嬉しくも覺えず、なほともすれば
うち眺めつつ、宇治の寺造る事を急がせ給ふ。

宮の若君の五十日になり給ふ日かぞへ取り給ひて、その餅のい
そぎを心に入れて、籠物檜破子などまで見入れ、つつ、世の
常のなべてにはあらずと思し心ざして、沈、紫檀、白銀、黄金
など、道々の細工ども、いと多く召しさらはせ給へば、われ
劣らじと、さまざまの事どもをし出づめり。みづからも、例の

など、道々の細工ども、いと多く召しさらはせ給へば、われ
劣らじと、さまざまの事どもをし出づめり。みづからも、例の

心のなしにや 大納言にもなり
帝の御婚にもなられた事故、氣
貫祿が出来て尊さも増したやう
に見える。

今はさりとも いくら何でも
ういやらしい浮氣などは忘れて
るに薫に對面された。中君は安
心して薫に對面された。

心にもあらぬ 氣もすまな
結婚をして、世は思ふ儘になら
ぬものだ、一入思ひ亂れて居
ります。

あいだちなくぞ あいそもなく
愚癡をこぼされる。

人もこそ そんな事をひよつと
して人がちらりとでも漏れ開い
ては大變です。

それわが有様の 大君も私と
同様に、私が六君の爲苦勞す
るやうに、羨みつこなしに女二
宮の事で身の不幸を恨まなけれ
ばならなかつたのだ。
いとど「思ひいでられ給ふ」を
修飾する。

かの打解け果てて 薫に身を許
さず終らうと決心してゐられ
た大君の御分別は、やはりと
は違つて奥の奥まで考へたもの
であつたと。
何かは 薫を疎外したやうに若
君を見せずにおくでもあるま
わりなきこと 迷惑な懸想の爲
に恨まれるのは仕方がないとし
て、それ以外には決してこの人
の御心にさからふまいと中君は
思召して。

物語 生兒がとりとめもない事
を發音する事。

世の思ひ離れがたく こんな考
へやう捨てがたくなつたのだら
うか。
いふかひなく 死なれた大君が
世間並に自分と結婚してこんな
可愛い子でも残して死なれたの
であるならば。

おもだたしげなる 薫に取つて
名譽な妻たる女二宮の御腹に早
かぬとは、何とも手のつけやう
のない薫の御料簡のやうだ。や
かくめぬしく 斯様に薫を女々
げいひねくれ者やうに書き上
地の文。

句宮の御不在の際に中君方へ
宮のおはしまさぬひまにおはしたり。心のなしにやあらむ、今
すこしおもくしくやんごとなげなる氣色さへ添ひにたりと見
ゆ。今はさりとも、むつかしかりしすろごなどは、思ひ紛
れ給ひにたらむ、と。(思ふ心) 心やすくて、たいめし給へり。さ
れどありしなからるの氣色に、まづ涙ぐみて、薫心にもあらぬま
じらひ、いとど、思ひの外なるものにこそと、世を思ひ給へ亂
るることのみなむまさりにたる」と、あいだちなくぞ愁へ給ふ。
中君「いとあるまじき御事かな。人もこそおのづからほのかにも漏
り聞き侍れ」などは宣へど、(中君の心中) 結構な御結婚にも氣はまされな
慰まず、(大君を) 忘れがたう覺え給ふらむ心深さよと、あはれに思ひ聞
え給ふに、(中君の心) おろかにもあらず思ひ知られ給ふ。おはせましかば
と、(中君の心) 口惜しう思ひ出で聞え給へど、(中君の心) それもわが有様のやうに、
姉妹とも
うらやみなく身を恨むべかりけるかし、何事も、(一はしの身分でなければ)
世の人めかしき事もあるまじかりけり、と覺ゆるにぞ、いとど、

かの打解け果ててやみなむと思ひ給へりし御心おきては、なほ
殊におもくしく思ひいでられ給ふ。若君をせちにゆかしがり
聞え給へば、(中君は) 恥かしけれど、何かは隔てがほにもあらむ、わり
なきこと一つにつけて怨みらるるよりほかには、いかでこの人
の御心にたがはじ、とおぼして、(中君直接には) みづからはともかくもいらへ
聞え給はで、(若君を薫の前へ) 乳母してさし出でさせ給へり。更なることなれば、
憎げならむやは。(怖ろしい程) ゆゆしきまで白くうつくしうて、高やかに物
語し、(笑ひなどし) うち多み・・・給へる顔を見るに、(自分の子として) わがものにて見まほ
しう羨しきも、世の思ひ離れがたくなりぬるにやあらむ。され
ど、いふかひなくなり給ひにし人の、世の常の有様にて、かや
うならむ人をも、とどめおき給へらましかば、とのみ覺えて、
此頃おもだたしげなる御あたり、いつしかなどは思ひ寄ら
ぬこそ、あまりすべなき君の御心なめれ。かくめめしくねぢけ
てまねびなすこそいとほしけれ。(薫が此處に記したやうな感心しない不完全な人物ならば)

げに 前の「いかでこの人の御
心にたがはまじ」を受けていふ。
薫のいふがままにこんな幼い
思はれるので。さつたのも嬉しく

心やすく 女二宮の所へ行かね
ばならぬ事ので、氣樂に此處で
夜を更かす事も出来ないのが苦
しく感ぜられるので。折りつ
れば袖こそ句へ梅の花ありとや
ここに鶯の啼く」

ふたがる方に 女二宮のあら
る藤壺から薫の三條宮が方ふさ
がりになる筈だといふ事にし
て。せちぶんとか 夏の節に入らぬ
前に薫が女二宮を自邸に引取る
事にされた。節分とは季節の移
り變る時で、立春立夏立秋立冬
の事。藤壺 女二宮のあられる飛香
舎庭に藤が植ゑてある。御
御子 玉座である。左のおとど 夕霧。
按察の大納言 紅梅右大臣を昔
の儘に呼んだのである。

藤中納言 左兵衛の督と兄弟で
鬚黒の子息。女二宮の御母の姪
達である。後涼殿 細流抄云此詞不審也藤
壺にての宴なれば後涼殿は其所
相違すべし古本こんらうの東と
あるをこらうてんと書誤歟。
樂所 禁中にある音楽の調習
所。雙調 雙調を宮とした呂旋音
階。お前に 女二宮からお出しにな
つた樂器を夕霧を始め按察藤中
納言等が取次いで主上に差上げ
られる。

おとど取りたまひて 薫が持参
したのを夕霧が取次いで主上に
差上げられる。夢に傳へし 横笛の卷一八三頁
参照。この折の清ら 今晚の善美な演
奏會をおいて又いつの世に光榮
な機會があらうぞ。

今日ぞ世になき 横笛卷一八
頁に「みづから」も更にこれ
の限りは吹き通さず。思はむ
人がいつか傳へていふ。と柏
木がいつか傳へていふ。と柏
さがいつか傳へていふ。と柏
さがいつか傳へていふ。と柏

御門の取りわきせちして 近づけて、睦び給ふべきにもあらしものを、
誠しき方さまの御心おきてなどこそは、めやすく物し給ひ
けめ、とぞ推し量るべき。げにいと斯くをさなき程を見せ給へ
るもあはれなれば、例よりは物語などこそまやかに聞え給ふ程に
暮れぬれば、心やすく夜をだに更かすまじきを、苦しう覺ゆれ
ば、歎くく出で給ひぬ。女房をかしの、人の御句ひや。折りつ
ればとかいふやうに、鶯も尋ね來ぬべかめり」など、煩はし
がる若き人もあり。

夏になれば、三條の宮ふたがる方になりぬべしと定めて、四月
朔日ごろ、せちぶんとかいふ事まだしき先に渡し奉りぬ。
明日とての日、藤壺にうへ渡らせ給ひて、藤の花の宴させ給
ふ。南の廂の御簾あげて、御椅子立てたり。おほやけわざにて、
あるじの宮の仕うまつり給ふにはあらず。上達部殿上人の饗な
ど、内藏寮より仕うまつれり。左のおとど、按察の大納言、藤

中納言、左兵衛の督、親王たちは三の宮、常陸の宮などさぶら
ひ給ふ。南の庭の藤の花のもとに殿上人の座はしたり。後涼殿
のひんがしに樂所の人々召して、暮れゆく程に雙調・吹きて、
うへの御遊びに、宮の御方より、御ことども笛など出ださせ給
へば、おとどを始め奉りて、お前に取りつつ参り給ふ。故六條
の院の御手づから書き給ひて、入道の宮に奉らせ給ひし琴の譜
二卷、五葉の枝につけたるを、おとど取りたまひて奏し給ふ。
つぎくに、きん、箏の御こと、琵琶、和琴など、朱雀院の物
どもなりけり。笛は、かの夢に傳へし古への形見のを、又なき
と主上がおほめになつたので

物のねなりとめでさせ給ひければ、この折の清らより、又はい
つかははえくしきついでのであらむ、と思して、とうで給へる
なめり。おとど和琴、三の宮琵琶・とりんに賜ふ。大將の
御笛は、今日ぞ世になきねの限りは吹き立て給ひける。殿上人
のなかにも、さうがにつきなからぬどもは召しいでつつ、い

濃淡のあるまだら染。
打敷 湖月抄「細、やうぎは盤
器也、或薬器也、孟、銀器
也、師、器也、四方の膳など
事也、白木を楊器といふ」
瓶子 酒徳利。
頻りては 自分だけがあまなり度
う。天蓋を頂いてはよくなら
當いける方もいらつしやらない
なからといふ譯で。
きし折もあるが、これは天蓋響
受の折に形式儀的によらば響
聲である事は次の一例におほ
海の説は皆今案を、一かうに
とせよ、知らざらんをば知り
とせよ、暫く也と孔子の格言
もあれば、但永延二年三月
廿五日小右記云攝政六十賀也
御被仰三壽言、御萬歳千秋云
々、攝政又三答奏云々、(可
尋注)攝政下二庭中一拜云々、
は祝言につきあたる事をして
さし返し、花鳥天蓋を給時は、
土器をめし、其かはらけをさし返
して飲む也、

と面白う遊ぶ。宮の御方より、ふんずく参り給ふ。沈の折敷四つ、紫檀の高坏、藤の村濃の打敷に折枝縫ひたり。白銀の様器、瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。兵衛の督、御まかなひ仕うまつり給ふ。御盃まゐり給ふに、おとど、頻りてはびんなかるべし、宮たちの御なかに、はたさるべきもおはせねば、大將に譲り聞え給ふを、憚り申し給へど、御氣色もいかがありけむ、御盃捧げて、「をし」と宣へる聲づかひもてなしさへ、例りきつた公式の作法ではあるが、今日はいとど見なしのおほやけ事なれど、人に似ず見ゆるも、今日はいとど見なしから一段と立派に見えるのであらう。さし返し賜はりて、おとり舞踏し給へる程、いとたぐひなし。上臈の親王たち大臣などの賜はり給ふだにめでたきことなるを、これはまして、御婿にてもてはやされ奉り給へる御覺え、あろかならず珍らしきに、限りあれば、くだりたる座に歸りつき給ふ程、心苦しきまでぞなむ見えける。紅梅右大臣の事 按察の大納言は、我こそ斯かる目も見むと思ひしか、ねたのわ

たはらの階よりくだりて御前に向ひて座をかへりつ
限り定まれる作法は
着席された元座に歸つて
榮に引きたるは、さうした光
程の宮の紅梅はもと藤壺に懸
想し通すお仕舞に女二宮を得
は文通など仕舞に女二宮を得
宮の希望を漏らしたお世話したいと
主上が聞き入られたようともなさら
ず人が終つた後、何うだ
斯程大層にしく婚にまでして、大
事なあらじかし、又と他に例はあ
るまい。また騒がるる事は」の
下につく倒置句法。
さすぐに悪口はしたもので藤
紙觸りて庭中各自詠歌の据ゑ
紙を載せる間に紙燭をともし、往
とてその間を紙燭をともし、往
例のいかに強ひて、歌の例によつ
て愛するに、強ひて、歌の例によつ
上町の書き流るる事々々見えない
やうだが、格別の事々々見えない

ざや、と思ひ居給へり。この宮の御母女御をぞ、昔心かけ聞え給へりけるを、参り給ひてのちも、なほ思ひ離れぬさまに聞え通はしなどし給ひて、はては宮を得奉らむの心つきたりければ、御後見望む氣色・漏らし申しけれど、聞召しだに傳へずなりにければ、いと心やましと思ひて、按察人がらはげに契り殊なめれど、など、時の御門の斯くおどろくしきまで婿かしづきし給ふべき。又あらじかし、九重の内、おはします殿近き程にて、ただ人の打解けさぶらひて、はては宴や何やと、もて騒がるる事は」など、いみじう誇りつぶやき申し給ひけれど、さすがにゆかし・ければ、参りて、心の内にぞ腹立ち居給ひける。紙燭さして歌ども奉る。文臺のもとに寄りつつ置く程の氣色は、誰も得意のやうであつたが、おのくしたりがほなりけれど、例のいかにあやしげに古めいたりけむと思ひやれば、あながちに皆も尋ね書かず。上の町の上臈とて、御口つきどもは、殊なること見えざめれど、しるし

なほ紛るる女二宮を得てもなほ大君のことが、それで紛れる時なく。

佛になりてこそは成拂した上でこそ大君との間の不思議なつらかつた因縁が何の報いによめるかを明かにして、その上で諸寺の急ぎ宇治の山莊を寺に改造する事。賀茂の祭四月の第二酉の日に行はれる。廿五日 四月廿餘日。

すべき事ども造作に必要な用事を指圖されたりなどして、朽木のもとを辨尼にあはざるので、二九八頁の歌によつて朽木といふ折節浮舟が来たのである。荒ましき荒々しい東國武士の腰に矢壺(しこ)を負うたのを大勢供につれて、一足先に山莊に殿はまづ入つて、一先にお入りなつて、御前も前驅の人々。御隨身ども、薫が供廻りの人々誰かといふのを、おし静めて、あの女車は誰かとお尋ねになると、今は清んで「かや」と讀む説に従ふ、彼や「かや」で「彼は誰か」の意と考へる。

初めも往きがけにも。おいや、おさうだ、開いた事のある人だ。

此處に又人、此處には外にお客が宿つておられるけれども、それは奥座敷(北面)にあられるから表の方(南面)が、あいて居ります。それはお泊り下さい。煩はしげに、浮舟方の人々は難儀な人に出會つたと思つて。

この寢殿はまだこの寢殿は新築早々でまだ戸締りがなくて外から丸見えであつて、おろしこめたる格子をおろしてしめきつてある。中の二間、柱間の二つある室で寢殿作りの建物には必ず設けられたもののやうである。消息して下に省文がある。

案内する尋ねるのであらう。君は車を、薫は車を浮舟だとお聞きになると直に。

から、大君の事が忘れられればとしかく過ぎにし方の忘られればこそはあらめ、なほ紛るる折なく、物のみ戀しく覺ゆれば、現世では慰め得ないわけのものやうだこの世にては慰めかねつべきわざなめり、佛になりてこそは、怪しくつらかりける契りの程を、何の報いとあきらめて思ひ離れめ、と思ひつつ、寺の急ぎにのみ心を、(は)入れ給へり。

賀茂の祭など騒がしき程過ぐして、(は)廿日・あまりの程に、例の宇治へおはしたり。造らせ給ふ御堂見給ひて、すべき事どもおきて宣ひなどして、さて例の朽木のもとを見給ひ過ぎむがなほあはれなれば、辨の住む方そなたさまにおはするに、女車の事々しきさまにはあらぬ一つ、荒ましきあづま男の、腰に物負へるあまた具して、力強い様子して下人・かず多く頼もしげなる氣色にて、宇治橋橋より今渡りくる見ゆ。田舎びたるものかなと見給ひつつ、殿はまづ入り給ひて、御前どもなどはまだ立ちさわぎたる程に、浮舟のこの車もこの宮をさしてくるなりけりと見ゆ。御隨身どもかや／＼といふを制

し給ひて、「何人ぞ」と問はせ給へば、訛聲の男が聲うちゆがみたるもの、「常陸の前司殿の姫君の、初瀬の御寺に詣でて歸り給へるなり。

初めも此處になむ宿り給へりし」と申すに、おいや、聞きし人なんなり、と思しいでて、供人等を人々をば他方に隠し給ひて、「はや御車入れよ。此處に又人宿り給へど、きたおもて北面になむ」と言はせ給ふ。

御供の人も皆狩衣姿にて、堂々たる姿ではないけれども事々しからぬ姿どもなれど、お供の人をしてなほけはひやしるからむ、煩はしげに思ひて、脇に引寄せたりし皆馬ども引きさけなどしつ、畏まりつつぞ居る。車は入れて、廊の西のつまにぞ寄する。この寢殿はまだあらはにて、(は)簾垂もかけず。おろしこめたる中の二間に、立て隔てたる障子の穴よりのぞき給ふ。

衣すれの音がするの、下著は脱いで脱ぎあきて、浮舟は車から直衣指貫の限りを着てぞおはする。とみにもありで、辨に尼君に消息して、身分のよさうな人斯くやんごとなげなる人のおはするを、「たれぞ」など案内するなるべし。君は、車をそれと聞き給へるより、浮舟に私の居る事を決していふな薫ゆめ、その人にもあらざると宣ふな」と、

まづ口がため 邸内の人々に
りあへず口止めされたので一同
その旨を心得て
はやおりさせ 人を以て浮舟に
いはせる詞
客人は お客はありますが他の
部屋にあられます
御前どものお供のあづま男の
田舎くさい割合には、今車から
おりた女房は物馴れて居つて無
難である
あらはなる 丸見えのやうな氣
がして恥かしい
例の御こと 又いつものおきま
りを仰しやる

さては又いづくのあらはなる
こちらの外はどこが丸見えだら
う
心をやりて いい氣になつて

いとよう 實によく大君を思ひ
出させるものがあるやうだ
顔は見えぬ程 浮舟の顔の見え
ないのがもどかしくて、胸をと
きめかしながら見てゐる
久しくおりに 長いことかかっ
ておりに奥にゐざり入つた
濃き桂に 以下浮舟の服装
撫子 表紅裏青又は薄紫
若苗色 木賊色と薄青色との中
間の色

この障子 蕪が今のぞいてゐる
襖 かんより見ゆる 屏風の上から
見える穴であるから、中がまる
見えである
さも心苦しげに それにしても
途中はお氣の毒なやうでいらつ
しやいましたね
泉河 今の木津川

この二月 浮舟は二月にも初瀬
詣をしたのであらう

二人して 最初に車からおりた
二人の女房 浮舟の事

常陸殿など 常陸前司の娘など
いふ田舎娘とは見えない
人のけはひ 人の居るやうな物
音を立てまいと思つて

若き人 例の二人のうちの若い
女房

老人 二人の中の年輩の女房

京人 辨の事
天下に 前司の北方は、自分こ
そ世界での大した腕利きと考へ
ていらつしやつたが

まづ口がため・させ給ひてければ、皆さ心得て、(う)車から
させ給へ。客人は物し給へど、(ひ)出たし
同乗の若い女房が
若き人のある、まづおりに、(は)車
まよりは、このおもと、馴れてめやすし。又大人びたる人今
一人おりに、「早う」といふに、(浮舟の車から)怪しくあらはなる心地こそす
れ」といふ聲、(かすかながら)ほのかなれどいとあてやかに聞ゆ。女房例の御こ
と。こなたはささくもあろしこめてのみこそは侍るめれ。さ
ては又いづくのあらはなるべきぞ」と、心をやりていふ。(浮舟が耻)つ
ましげにおるるを見れば、まづ頭つき様態、ほそやかにあてな
る程は、いとよう物思ひいでられぬべし。(髪恰好)扇をつとさし隠した
れば、顔は見えぬ程心もとなくて、胸うちつぶれつつ見給ふ。
車は高く、おるる所はくんだりたるを、(低くなつてゐるのを)この人々は安らかにおり
なしつれど、いと苦しげにややみて、久しくおりにゐざり入る。
濃き桂に、(濃い紅)撫子と思しき細長、若苗色の小桂着たり。四尺の屏

風をこの障子に添へて立てたるが、かみより見ゆる穴なれば、
(外から見えないやうに)残るべくもあらず。(所なし)こなたをばうしろめたげに思ひて、あなた
ざまに向きてぞ添ひ臥しぬる。(脇息の上につむきになつて)女房さも心苦しげにおはしましつ
るかな。泉河の舟渡りも、誠に今日はいと怖ろしうこそありつ
れ。この二月には、(きんご)水のすくなかりしかばよかりしなりけり。
いでや、ありきは、東路を思へば、いづこか怖ろしからむ」な
ど、二人して苦しとも思ひたらず言ひ居たるに、(き)しうは、(疲れて口)
もせでひれ臥したり。(かひな)腕をさし出でたるが、(まるく)まろらかにをかし
げなる程も、常陸殿などいふべくも見えず、誠にあてなり。(葉は)や
うく腰痛きまで立ちすくみ給へど、(身動きもしないでじつとしてゐられたが)人のけはひせじとて、な
ほ動かで見給ふに、若き人、「あなかうばしや。いみじき香の香
こそすれ。尼君のたき給ふにやあらむ」と驚く。老人、「誠にあ
なめでたの、物の香や。京人はなほいとこそみやびかに今めか
しけれ。天下にいみじき事とおぼしたりしかど、(常陸では)あづまにて斯

鈍色青色といへど、鈍色や青色の尼姿ではあるが誠に綺麗なものだ。あなたの辨尼の居るあちらの簀子から童女が来て、折敷へぎ製の角盆。これに菓子盛つて簾垂の下からそれからそれと差入れたのである。

おどろかねば、浮舟は疲れて眠つてゐるのである。

これよりまさる、薫は浮舟以上の身分の女を、中宮の御所を始めとして、あちらこちらで、器量のよいものも心の上品なものも、大勢飽きる程見馴れてゐられる。おぼろげならは、餘程の美人でない。薫はそれらに目も心もとまらない。人から非難される程、直に、性格の人である。舟がどれ程の美人でも、浮舟がこれ程の美人でも、ないのにかねて、無闇に見たが、て立去る。かねて、無闇に見たが、て立去る。かねて、無闇に見たが、て立去る。

御心地惱まし、薫の供人は薫が今隙見をしてゐる事を隠さうとして斯くいふのである。

心しらひて、薫をかねて浮舟を見たいやうに言つてゐられた。で、かうした好機會に浮舟と話をしたくて夕方まで居られるのだらう。斯くのぞき給ふ、薫がかうして隙見をしてゐられる事を辨は知らず。例の御庄の例の薫の莊園の支配人が調進した破籠や何かを辨配の所にも分けてやつたのである。が、辨尼はそれらをあづま人も食はせたりなど諸事を取りまかなつた後、客入、浮舟、前、「装束のあらまほしう云々」とほめた事。

日たけては、朝早くお着きかと思つて居つたのに。この老人、浮舟の二人の侍女中の年輩の女。無期に、いつまでも、久しい間。

そばみたる、わきを向いてゐる。浮舟の横顔が、薫の方からは大層よく見える。

かる薫物の香はえあはせ出で給はざりきかし。この尼君のすまひは、斯くいとかすかにおはすれど、装束のあらまほしう、鈍色青色といへど、いとよきにぞあるや」などほめ居たり。あなたのだ簀子より童來て、「御湯など參らせ給へ」とて、折敷でも取り續きてさし入る。菓子取寄せなどして、女房物けなまはる。これ」などおこせど、おどろかねば、二人して、栗などやうの物にや、ほろくと食ふも、聞き知らぬ心地には、傍痛くてしぞき給へど、又ゆかしくなりつつ、なほ立寄り、見給ふ。これよりまさるきはの人々を、後の宮を始めて、此處彼處にて、かたちよきも心あてなるをも、こころ飽くまで見ならし給ふべけれど、おぼろげならは、目も心もとどまらず、あまり人にもどかるるまで物し給ふ御心地に、只今は、何ばかりすぐれて見ゆる事もなき人なれど、斯く立去りがたくあながちにゆかしきも、いと怪しき心なり。

尼君は、この殿の御方にも御消息聞えいだしたりけれど、「御心地惱ましとて、今の程うち休ませ給へるなり」と、御供の人々心しらひて言ひたりければ、この君を尋ねまほしげにおぼし宣ひしかば、斯かるついでに物言ひ觸れむとおぼすによりて、日を暮し給ふにやと思ひて、斯くのぞき給ふらむとは知らず。例の御庄の預りどもの參れる破籠や何やと、こなたにも入れたるを、あづま人も食はせなど、事ども行ひおきて、うちけさうじて、客人のかたに來たり。ほめつる装束、げにいとかはらかに、みめもなほよしく、しく清げにぞある。昨日おはし着きなむと待ち聞えさせしを、なか今日も日たけては」と言ふめれば、この老人、「いと怪しう苦しげにのみせさせ給へれば、昨日はこの泉河のわたりにとどまりて、今朝も無期に御心地ためらひて、」などいらへて、起せば今ぞ起き居たる。尼君を恥ぢらひて、そばみたるかたはら目、これよりはいとよ

ただそれと、まるで大君そつくりと思ひ出されるにつけても、又例によつて涙がこぼれた。返事をするに、尼君の聲や調子が、小聲ではあるが、申君にも大層よく似てゐると聞える。可憐な女だ、あはれなりける。これより口惜しからむ。浮舟も、身分が低くても縁につながらぬ。女でさへあつたら、これ程大君に似通つてゐる女を見ることが、ほつてはおけないやうな気がするのだから。

世の中に、あなたは生きてゐられたもの、それを私は死なれたいと思つてゐる。浮舟が、大君のやうにおもはれる。心なほいといふせかり。鏡だけは、はやり気分もさつぱりとはしなかつたであらう。これは他人、浮舟は大君その物な様子だ。

人の咎めつる、先刻浮舟の侍女達が、氣にとめた香を、薫が近くから、そのいれたので、うらなひたい。放題の事も、いはいやうになつてしまつたのであらう。

日も暮れもて、日も次第に暮れ穴の所から出て、薫もそろりと襖の出す障子口に、いつも辨を呼び出す。

折しも嬉しく、丁度よい時に來が、あはせて嬉しく思つてゐる。だしか、仰言侍りし、二九七頁六行、おいたし、か、仰言侍りし、御依頼がございませう。初瀬詣は、浮舟が初瀬詣に來られたついでに、浮舟の母君に、貴方の思召の趣は、それとなく申し傳へ、いと傍痛く、浮舟を大君の身代りとは、誠に氣恥かしく勿體ない比較でございませう。と、浮舟の母君が申されましたが。

く見ゆ。誠にいとよしあるまみの程、かんざしのわたり、かれをも、委しくつくつくとしも見給はざりし御顔なれど、これを見るにつけて、ただそれと思ひ出でらるるに、例の涙落ちぬ。尼君のいらへうちする聲けはひの、ほのかなれど、宮の御方に、も、いとよく似たりと聞ゆ。あはれなりける人かな、斯かりけつたに、今まで詮索もせずほつておいた事よ。惜しからむきは、品ならむゆかり。にてだに、かばかり通ひ聞えたらむ人を見ては、おろかにえ思ふまじき心地するに、ましてこれは、知られ奉らざりけれど、誠に故宮の御子にこそはありけれ、と見なし給ひては、限りなうあはれに嬉しく覺え給ふ。只今も、這ひ寄りて、世の中におはしけるものをと言ひ慰めまほし、蓬萊まで尋ねて、かんざしの限りを傳へて見給ひけむ。御門は、なほいといふせかりけむ、これは他人なれど、慰めどころありぬべきさまなり、と覺ゆるは、この人に契りのおはし

けるにやあらむ。尼君は、物語すこしして疾く入りぬ。人の咎めつるかをりを、近くでのぞき給ふなめりと心得てければ、打解けごとも語らはずなりぬるなるべし。

日も暮れもてゆけば、君もやをら出でて、御ぞなど着給ひてぞ、例召しいづる障子口に尼君召しいで給ひて、有様など問ひ給ふ。

折しも嬉しくまうで來あひたるを、いかにぞかの聞えしことは、と宣へば、誰しか。仰言侍りしのは、さるべきついで侍らばと待ち侍りしに、去年は過ぎて、この二月になむ初瀬詣の

たよりに對面して侍りし。かの母君に、思召したるさまは、仄めかしはべりしかば、『いと傍痛く忝き御よそへにこそは侍るなれ』となむはべりしかど、その頃ほひは、のどやかにあはしまさずと承りし。折びんなく思ひ給へつみみてなむ斯くなども聞えさせ侍らざりしを、又この月にもまうで、今日歸り給へるなめり。行き歸りの中宿りには、かう睦びらるるも、只過ぎに

斯くおはしますとも 貴方が此
處においでなすは浮舟に何でお
知らせ致しませうぞ。

忍びやつれたる わが微行のや
つれ姿を見られたくないと思つ
て、邸内の人々に口どめはして
おいたが、併しどうだらう。三
下衆どもは下衆たちはすつ
りしやべつてしまつた事だ
う。一人物し給ふ 浮舟一人で來ら
斯く契り深く 浮舟との前世
の縁が深いから、此處に來
はせられた。現金な事を仰し
う。ちつけに 御縁ですか。
頼鳥のついでに 顔鳥の美し
で、嘗て聞きし大君のそれ
似る草の茂みかと思つて、
處に來たの比した。顔鳥は
鳥處に比した。顔鳥は美しい

し御けはひを尋ね聞えらるる故になむ侍るめる。かの母君は、
さはる事ありて、この度は獨り物し給ふめれば、斯くおはしま
すとも、何かは物し侍らむ。と聞ゆ。田舎ひたる人ども
に忍びやつれたるありきも見えじとて、口がためつれど、いか
があらむ。下衆どもは隠れあらじかし。さていかがすべき。一
人物し給ふらむこそなか／＼心やすかなれ。『斯く契り深くてな
む参り來あひたる』と傳へ給へかし』と宣へば、辨うちつけに。
いつの程なる御契りにかは』と打笑ひて、辨さらばしか傳へ侍
らむ』とて入るに、
顔鳥の聲も聞きしに通ふやと繁みを分けて今日ぞ尋ぬる
只口ずさみのやうに宣ふを、入りて語り聞えけり。

昭和十四年九月十三日印刷
昭和十四年九月十六日發行

校對 源氏物語新釋 卷の五
定價金貳圓八拾錢

著者 吉澤義則
發行者 下中彌三郎
印刷者 齋藤道太郎
東京市日本橋區吳服橋
東京市日本橋區吳服橋

發行所

東京市日本橋區吳服橋 株式會社
平凡社
電話日本橋 二二二五 五五五九 七八七番番

44W-71^o

